上垣内遺跡

大阪府埋蔵文化財調査報告二〇一五―四

大阪府教育委員会

大阪府埋蔵文化財調査報告2015－4

上　垣　内　遺　跡

－都市計画道路梅が丘高柳線の建設に伴う発掘調査－

平成27年11月

大阪府教育委員会

上　垣　内　遺　跡

－都市計画道路梅が丘高柳線の建設に伴う発掘調査－

大阪府教育委員会

序　　文

北河内、寝屋川の地は、淀川と寝屋川が形成した低湿地部と生駒山地が東に張り出した丘陵部からなります。本報告書で発掘調査の成果を報告する上垣内遺跡は、寝屋川市の南東部、低湿地と接する太秦の丘陵上に立地しています。

ここには、国史跡高宮廃寺をはじめ旧石器時代以降、各時代の多くの遺跡が所在します。近年、この地域で実施された第二京阪道路の建設に伴う大規模な発掘調査では、小路遺跡の古代祭祀資料、高宮遺跡の古墳時代集落や古代の大型倉庫群、太秦遺跡の古墳時代の集落や古墳群など、顕著な成果があげられています。

これらに隣接する上垣内遺跡は、これまで遺物の散布が確認されているだけで、遺跡の詳細な時期や性格はわかりませんでした。今回の調査は、上垣内遺跡におけるはじめての本格的な発掘調査でしたが、古墳時代後期の大型の竪穴住居跡を検出するなど、大きな成果をあげることができました。さらに、この住居跡では保存状態のよい作りつけたカマド跡がみつかり、これは当時の人びとの生活の姿を彷彿とさせるものでした。

今回の調査成果を足掛かりにして、今後、さらに上垣内遺跡をはじめ太秦の丘陵上の遺跡群の実態を明らかにしていきたいと考えております。これによって、具体的に地域の歴史の変遷を追うことが可能になると考えます。

最後になりましたが、調査に当たって多大なご協力をいただいた地元のみなさまや大阪府枚方土木事務所に記して感謝いたします。

平成27年11月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　星住　哲二

例　　言

１．本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部から依頼を受けて実施した都市計画道路梅が丘高柳線の建設に先立って実施した上垣内遺跡（寝屋川市明和二丁目所在）の発掘調査報告書である。併せて実施した上垣内遺跡（高倉二丁目所在）、国守遺跡（高倉二丁目・梅が丘二丁目所在）の確認調査の成果も記載した。

２．発掘調査は、文化財保護課調査第一グループ専門員岩瀬　透、同　小林義孝を担当として、平成26年７月1日から11月11日まで実施した。
整理作業は、平成27年度に調査管理グループ主査三木　弘、副主査藤田道子と調査事業グループが担当した。

３．本調査の調査番号は、14009である。

４．本書に掲載した遺構写真は、調査担当者が撮影し、出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。

５．本調査で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。

６．本書の編集・執筆は小林が担当した。

７．発掘調査、遺物整理および本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。

８．本書は300部作成し、一部あたりの印刷単価は540円である。

目　　次

序文
例言
第１章　調査の経過と方法 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　発掘調査の方法 …… 2
第２章　位置と環境 …… 2
　第１節　調査地の位置 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　調査の成果 …… 5
　第１節　基本層序 …… 5
　第２節　検出された遺構 …… 5
　第３節　出土した遺物 …… 15
第４章　上垣内遺跡・国守遺跡の確認調査 …… 17
第５章　まとめ …… 23

挿図目次

第１図　発掘調査区の位置 …… 1
第２図　上垣内遺跡周辺の遺跡分布図 …… 3
第３図　調査区断面図 …… 6
第４図　第１面（中世）平面図 …… 7・8
第５図　第２面（古墳時代）平面図 …… 9・10
第６図　竪穴住居跡88　平面・断面図 …… 12
第７図　竪穴住居跡88　カマド平面・断面図 …… 12
第８図　竪穴住居跡84　平面・断面図 …… 13
第９図　竪穴住居跡84　カマド平面・断面図 …… 13
第10図　掘立柱建物平面・断面図 …… 14
第11図　柱列１（柱穴80～82・89・90）平面・断面図 …… 14
第12図　竪穴状遺構32平面・断面図 …… 14
第13図　出土土器実測図 …… 16
第14図　出土石器実測図 …… 17
第15図　上垣内遺跡・国守遺跡確認調査トレンチ配置図 …… 18
第16図　確認トレンチ断面図（１）…… 20
第17図　確認トレンチ断面図（２）…… 21
第18図　第17トレンチ出土土器（１）…… 22
第19図　第17トレンチ出土土器（２）…… 22

図版目次

図版１　第１面（中世）全景
図版２　第２面（古墳時代）全景
図版３　竪穴住居跡88
図版４　竪穴住居跡84
図版５　竪穴状遺構32
図版６　掘立柱建物・確認調査第17トレンチ
図版７　出土遺物（１）
図版８　出土遺物（２）
図版９　出土遺物（３）
図版10　出土遺物（４）

第１章　調査の経過と方法

第１節　調査に至る経過

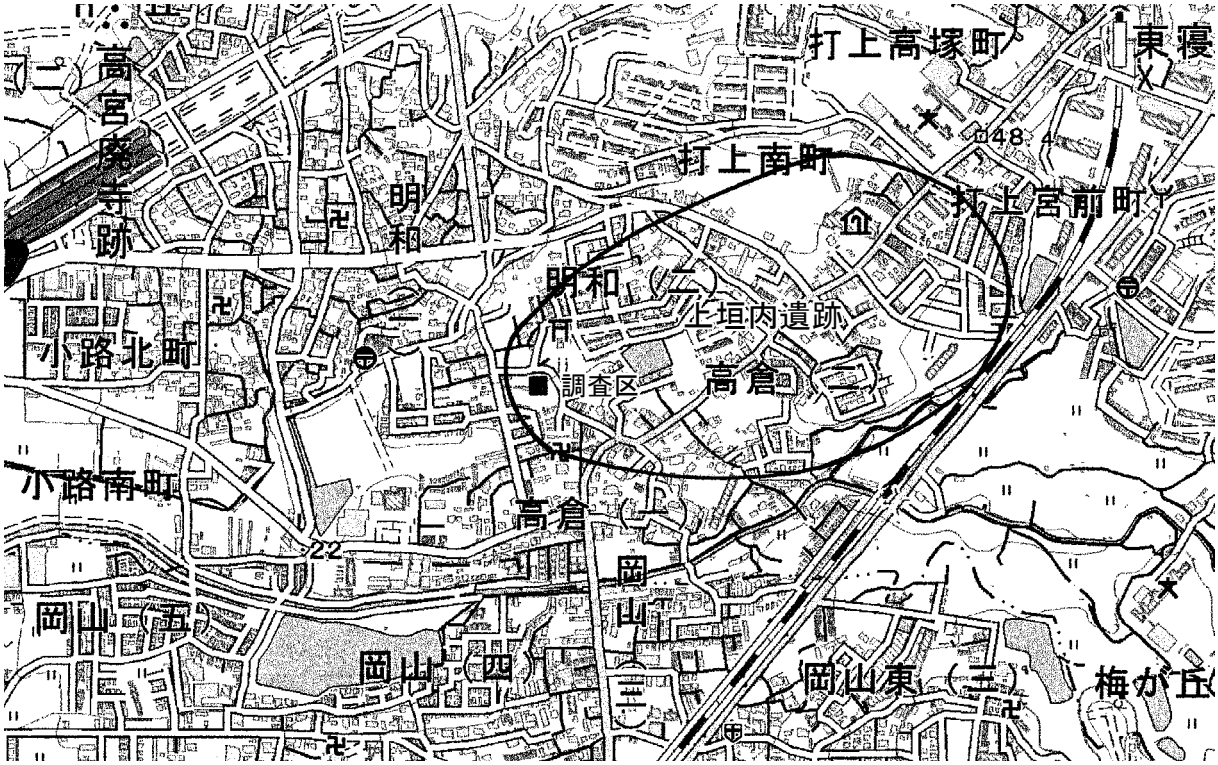
大阪府都市整備部では、都市計画道路梅が丘高柳線を計画し、その建設予定地が、上垣内遺跡、国守遺跡の範囲を縦断するため、遺跡の遺存状態を確認するため当該遺跡内において確認調査を実施することとなった。また、当該道路予定地において周知の埋蔵文化財包蔵地以外の場所においても、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査も併せて計画された。

平成25年度の調査　確認・試掘調査は、平成25年度において当該予定地の東部分（現在の東高野街道より東側）において実施した。この範囲に12か所の確認・試掘トレンチを設置した。この調査においては発掘調査を必要とするような顕著な遺構・遺物は検出されなかった（「上垣内遺跡等」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』18、2014年。調査番号は13040）。

しかし当該年度の対象範囲の一部に小規模なトレンチの成果では判断することができない部分があったため、平成26年度に再度試掘調査を実施することとなった。

平成26年度の調査　平成25年度の試掘調査範囲の一部を再度試掘調査した結果、顕著な遺構等が検出されたため、当該地を含めて上垣内遺跡の範囲拡大の手続きをとった上で、発掘調査を実施した。

また、現在の東高野街道より西側の道路予定地内（上垣内遺跡、国守遺跡）の確認調査を18か所の確認調査トレンチを設置して実施した。



第１図　発掘調査区の位置

確認調査は、道路予定地内の地形や個々の部分の形状を考慮して５ｍ×５ｍ程度の確認調査トレンチを設置し、重機と人力を併用して掘削し、遺構・遺物の検出につとめた。

本書は、平成26年度に実施した上垣内遺跡の発掘調査と上垣内遺跡・国守遺跡の確認調査の成果をまとめたものである。

第２節　発掘調査の方法

上垣内遺跡隣接地における再度の試掘調査は、重機と人力による掘削を併用しながら、前年度の試掘調査で設置したトレンチよりも広い面積で実施し、遺構・遺物の有無を確認した。その結果、遺物包含層に含まれる遺物量は少ないものの中世と古墳時代の遺構面がかなりのひろがりをもつことが確認された。

この成果により埋蔵文化財包蔵地としての上垣内遺跡の範囲拡大を行い、平成26年度においては道路予定地の内約450㎡の発掘調査を実施した。

発掘調査は２面の遺構面に伴う遺物包含層を人力で掘削し、精緻に遺構の検出につとめた。遺構の実測は、調査区が民家に隣接していることや当該調査地への大型重機の進入が困難なことのため、写真測量にはよらず、手測りにより実施した。

第２章　位置と環境

第１節　調査地の位置（第１図・第15図）

上垣内遺跡は、寝屋川市の南東部の位置する太秦の丘陵の南端部、東西に流れる讃良川を南方に望む丘陵の南斜面一帯に所在している。発掘調査を実施した調査区は、遺跡の西端に位置し、北東から南西に延びる丘陵上の尾根の南側斜面にあたる。

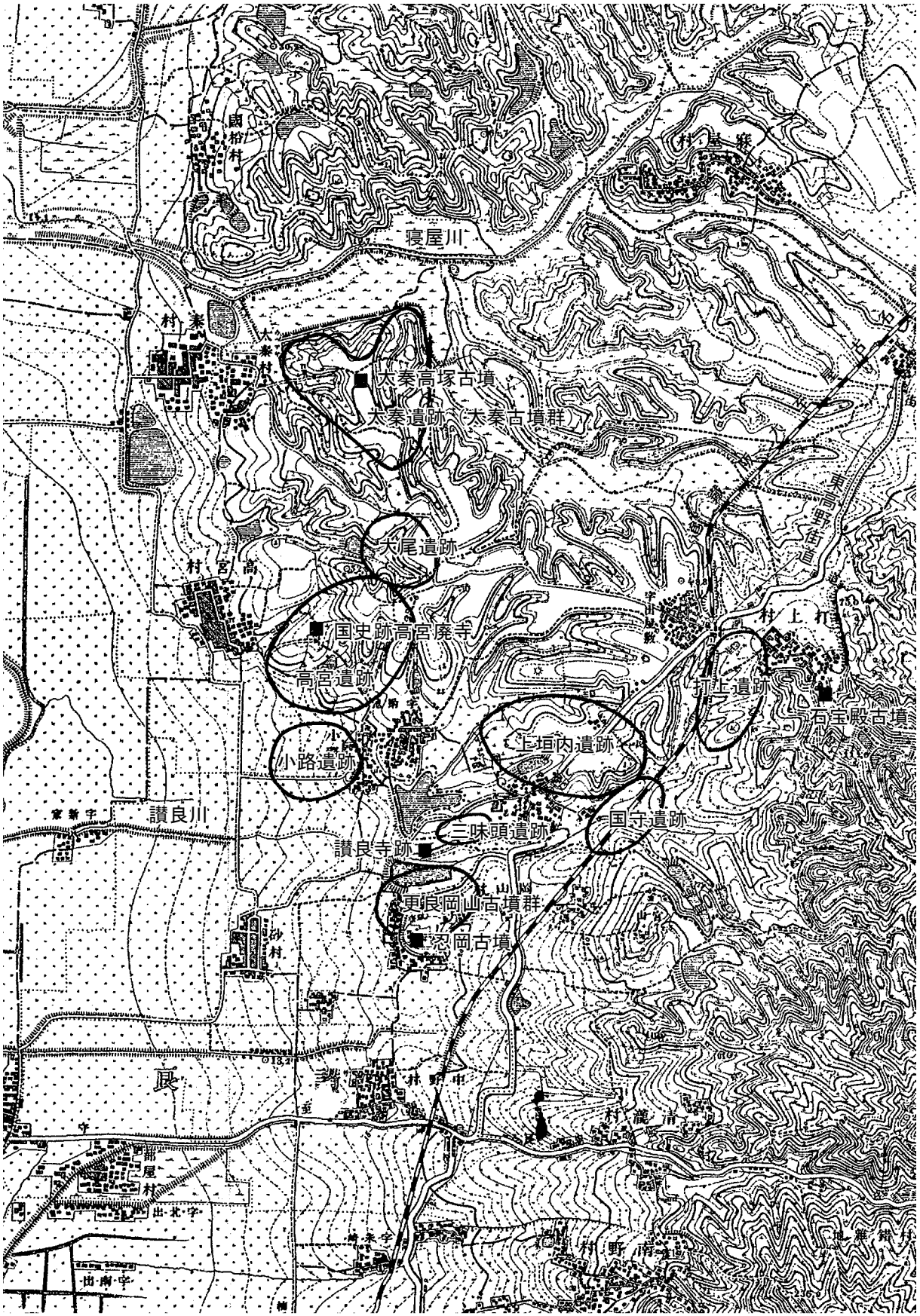
上垣内遺跡・国守遺跡における確認調査は、北西から南東に延びる丘陵の南側斜面の部分（上垣内遺跡）と現在JR学研都市線が走る北東から南西に走る丘陵に刻まれた大きな谷地形の中（国守遺跡）で実施した。

第２節　歴史的環境（第２図）

上垣内遺跡は、生駒山地が西に張り出したが所在する太秦の丘陵上に所在する。この丘陵は北側を寝屋川、南側を讃良川に画され、東側は沖積地を望む。この地は高位段丘にあたり、多くの開析谷が刻まれている。谷筋に溜池が築かれており、この地域の景観を形作っている。

起伏の多い丘陵地にあたる上垣内遺跡一帯は、かつては畑作が盛んであったという。早くから宅地化が進み、丘陵斜面を雛段状に造成しており、当該の調査区においても造成時の厚い盛土を確認している。

上垣内遺跡は、今回の調査が実施される以前には、遺物の散布が知られていたのみである。しかし上垣内遺跡の周辺地域において従前から多くの遺跡や遺物が発見され周知されている。この地域の考古学による歴史的環境に関する認識は、『寝屋川市史』第１巻（考古資料編Ⅰ）〔寝屋川市　1998年〕の刊行



第２図　上垣内遺跡周辺の遺跡分布図（仮製２万分の１地形図「星田村」を利用）

と2000年代に実施された第二京阪道路の建設に伴う発掘調査の成果によって大きく更新された。

前者はそれまでの調査成果や集積されてきた資料を整理したものであった。後者は北河内地域を縦断するように調査区が設定された大規模な調査の成果であり、当該地域周辺では小路遺跡、高宮遺跡、大尾遺跡、太秦遺跡（太秦古墳群）などの遺跡で多くの成果が上げられ、豊かな地域史像の構築に大きな役割を果たした（『北河内発掘！第二京阪道路内遺跡の発掘調査記録』財団法人大阪府文化財センター2005年　など参照)。

今回の調査において上垣内遺跡からは、古墳時代後期、古代、中世の遺構や遺物が検出された。当該時期の歴史的環境を中心に整理する。

旧石器時代から弥生時代　旧石器をはじめ古い時期のものも散見されるが、太秦の丘陵上で大きく遺跡が展開するのは弥生時代中期である。竪穴住居で構成された大規模な集落（太秦遺跡）やそれに伴う方形周溝墓による墓域（大尾遺跡）が検出されている。

古墳時代　丘陵の東部では高宮遺跡で多くの遺構・遺物が検出されている。古墳時代前期には丘陵の斜面から裾部において方形周溝墓が造営される。古墳時代中期には丘陵を雛壇に造成して竪穴住居群が形成される。ここからは朝鮮半島との交流をうかがうことのできる渡来系の土器が多数出土している。同時期の小形方墳25基が太秦遺跡（太秦古墳群）で検出され、円筒埴輪や形象埴輪の出土もみられた。また太秦古墳群の範囲は広く、直径約35mを測る太秦高塚古墳をはじめ中期・後期の多くの小形古墳で構成されている。早くから不時に資料が発見されており、これらは『寝屋川市史』第１巻（考古資料編Ⅰ）に集約されている。

上垣内遺跡の南方、讃良川の北岸に位置する三味頭遺跡では、古墳の周溝の一部とともに円筒埴輪、朝顔形埴輪と家形・蓋形・鳥形形象埴輪の断片が検出されている。また上垣内遺跡の南西方約500ｍには全長約90ｍを測る前期の前方後円墳である忍岡古墳が所在し、一帯の首長の奥津城と評価されている。５世紀後半には忍岡古墳が築かれた丘陵の北裾部に更良岡山古墳群が形成され、６世紀のはじめまで造営される。

また東方の丘陵高所には、古墳時代終末期の横口式石槨を主体とする石宝殿古墳が所在している。

古代　太秦の丘陵の東部には国史跡高宮廃寺が存在する。東西二塔をもつ薬師寺式伽藍配置の白鳳期の寺院である。隣接する高宮遺跡では、一辺約1.5ｍを測る柱穴で構成された大形の総柱建物跡（倉庫）が５棟検出されている。さらに高宮遺跡、大尾遺跡、太秦遺跡では多くの掘立柱建物も存在している。これらの建物群は、高宮廃寺の伽藍の中軸の方位とおおむね一致しており、寺院に付属した施設や関連した氏族の集落であったことが指摘されている。この一帯に河内国讃良郡の中心となる勢力が所在したことがうかがわれる。また丘陵の裾部に所在する小路遺跡では、流路から人面墨書土器など祭祀遺物が多数出土しており、高宮遺跡との関連が想定されており、その官衙的な性格を示すものであろう。

丘陵の東部､JR東寝屋川駅の東側一帯に広がる打上遺跡では、奈良時代の14棟の掘立柱建物跡が検出された。これらは主軸方向の差異によって３時期に分類され、集落が継起的に変遷していく様子が理解できる。また讃良川の南岸には白鳳寺院である讃良寺跡が所在する。

太秦の丘陵の東部を東高野街道が通る。小規模な経路の変遷はあるが、河内を南北に縦断するこの街道が、丘陵部から生駒山地の山麓地域への出口に当該地一帯は当たる。長岡遷都の後、東高野街道は、

都と紀伊国や四国を結ぶ南海道とされ、古代国家の大動脈となる。

中世　高宮遺跡では鎌倉時代によると集落が造営される。丘陵の裾部に掘立柱建物を造り、丘陵をおりた低地を耕作地として生活し、丘陵の上部を墓域として利用した。墓域からは烏帽子と鉄刀、土器などが出土した土壙墓が検出されている。この地を拠点とした有力者の屋敷地を中心とした一連の遺構群と評価できる。

丘陵東部では、国守遺跡において、大量の中世の遺物が出土している。東高野街道沿いに繁栄した中世集落の存在が予想されている。

第３章　調査の成果

第１節　基本層序（第３図）

本調査区は、本来所在南西方向に傾斜する丘陵斜面に位置する。そのため調査区の南部では遺物包含層や遺構面の遺存状態は良く、北部は近世以降の耕作地が造成される際にかなり大きな削平をうけている。

第１層（盛土）は10～50㎝の厚さで調査区全体に施されていた。当該地点が住宅地として開発された時のものである。

第２層は宅地開発以前の耕作土である。これら現代に形成された土層の下層には基本的に４層、地点によってはさらに１層の堆積がみられた。いずれの土層も包含している遺物は少ない。

第３層は黄橙色土、第４層は灰色土である。この２層によって第３層上面の耕作面（近世以降）の造成を行っている。

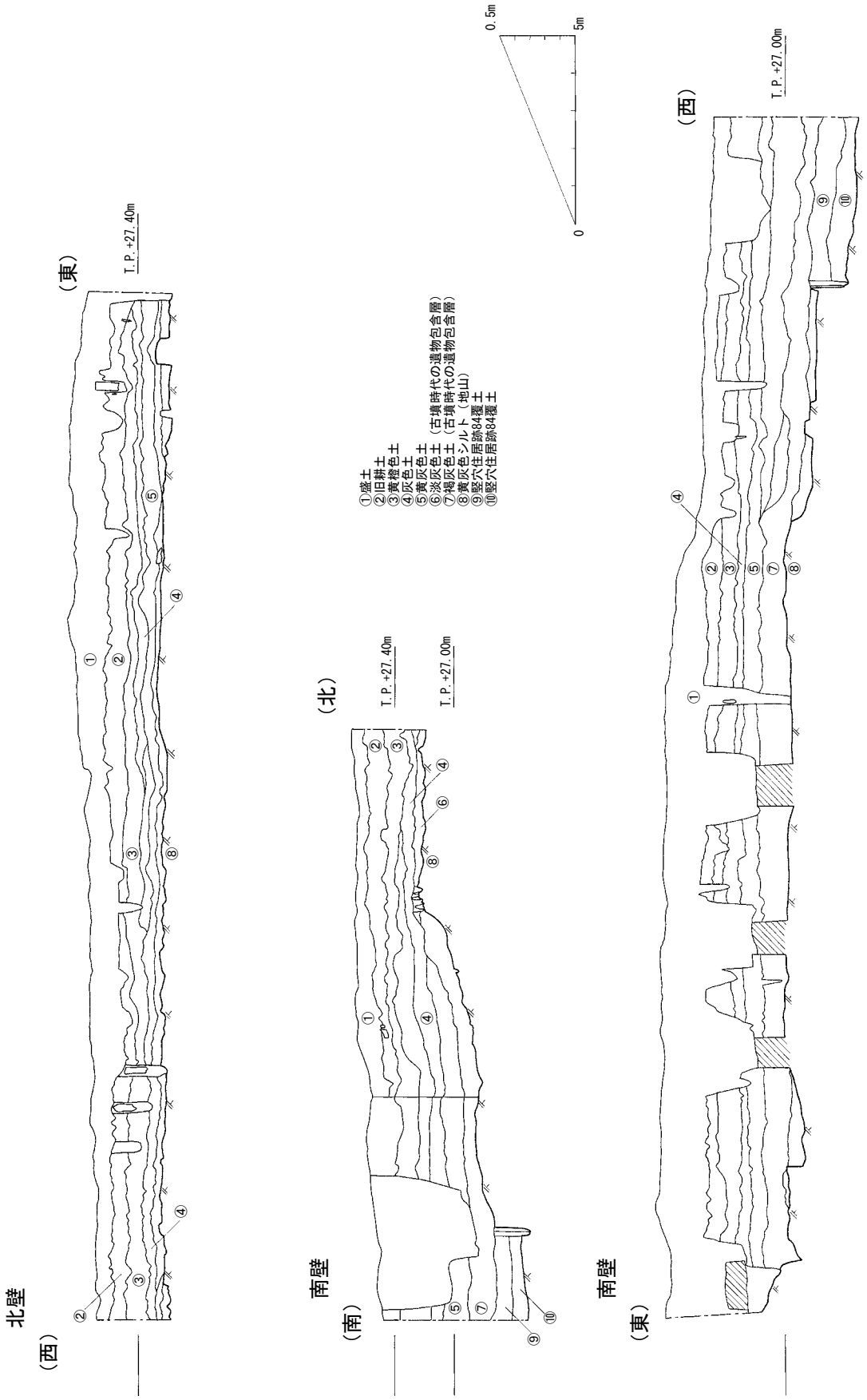
第３層、第４層を除去した第５層上面が中世の時期の遺構面（第１面）である。第５層は黄灰色土である。調査区の南部は次第に南に向かって傾斜していくが、第５層は北側で薄く、南部で厚く、上面を水平にすることを意識している。第６層は淡灰色土、第７層は褐灰色土で、古墳時代の遺物包含層である。いずれも調査区南部の傾斜地に堆積していた。古墳時代の遺構は第８層である黄灰色シルト（地山）の上面に形成されていた（第２面）。

第２節　検出された遺構

遺存していた遺構面　約450㎡の調査区は、先にも述べたように切土盛土によって造成された住宅地の跡にあたり、建物の基礎やコンクリート製の土間跡などにより攪乱されている部分も多い。本来の土層が保全されている部分では、間層をはさんで上下２面の遺構面が検出された。上面（第１面）は中世に、下面（第２面）は古墳時代後期に比定される。

第１面の遺構（第４図・図版１）　第１面では主に東西方向の中世の耕作溝が検出された。溝の方向は、南正方位より東北―西南方向にやや振る。遺構は調査区の東部・西部・南部で良好に検出された。東部・南部では東西方向の溝が多く検出され、一部でそれと切り合うように南北溝が検出された。

多くの溝は３～４条が近接してまとまりながら同一の方向に走る。最長の溝で長さ約11ｍを測る。東


北壁
（西）
（東）
T.P.+27.40m
南壁
（南）
（北）
T.P.+27.40m
T.P.+27.00m
南壁
（東）
（西）
T.P.+27.00m
0
0.5m
5m
①盛土
②旧耕土
③黄橙色土
④灰色土
⑤黄灰色土
⑥淡灰色土（古墳時代の遺物包含層）
⑦褐灰色土（古墳時代の遺物包含層）
⑧黄灰色シルト（地山）
⑨竪穴住居跡84覆土
⑩竪穴住居跡84覆土

第３図　調査区断面図

部では三条がまとまって南北方向に走る溝を検出した。最長の溝で長さ約10ｍを測る。溝の幅は基本的に30㎝前後、深さは５～15㎝前後を測る。遺構からは土師器の小片などのほかは顕著な遺物の出土はなかった。

溝１　調査区最東端で検出した。やや西に振って走る南北方向の溝である。幅約35㎝、深さ約10㎝を測る。黄灰色土を覆土とする。

溝２　溝１に西隣する。溝１にほぼ平行して走る。幅１～1.5ｍ、深さ約10㎝を測る。黄灰色土を覆土とする。

溝８　調査区の南東隅で検出した。溝１、溝２と直行する東西溝。幅50～75㎝、深さ約10㎝を測る。にぶい黄橙色土を覆土とする。

耕作溝が遺存していない調査区東部においては、幅の広い溝状の遺構や落ち込みが検出された。

溝26　幅約1.0ｍ、深さ約25㎝を測る東西方向に溝である。灰黄色土を覆土とする。

落ち込み29　長さ約3.5ｍ、幅1.5～2.5ｍ、深さ約８㎝を測る浅い落ち込みである。灰黄色土を覆土とする。

第２面の遺構（第５図・図版２）　第２面では、調査区のかなりの部分が後世の削平を受けており、遺構は調査区南西部と東辺部においてのみ検出した。南西部において軸を揃えて近接して建築された竪穴住居跡２棟、掘立柱建物の一部、柱列などが検出された。

竪穴住居跡88（第６・第７図・図版３）　東西約5.0ｍ、南北約3.5ｍ、深さ0.1ｍ前後を測る長方形を呈する竪穴住居跡である。ほぼ正方位に主軸をもつ。覆土は上下２層に分かれる。周囲に幅20～30㎝の壁溝が巡る。主柱穴は、四隅のコーナー部近くで検出された。北東の柱穴95は直径25㎝前後、深さ約15㎝を測る。南東の柱穴104は直径25㎝前後、深さ約12㎝を測る。北西側の柱穴94は、直径25㎝前後、深さ約12㎝を測る。南西側の柱穴101は、直径25㎝前後、深さ約10㎝を測る。主柱穴の覆土はいずれも１層で黄橙色粘質土である。

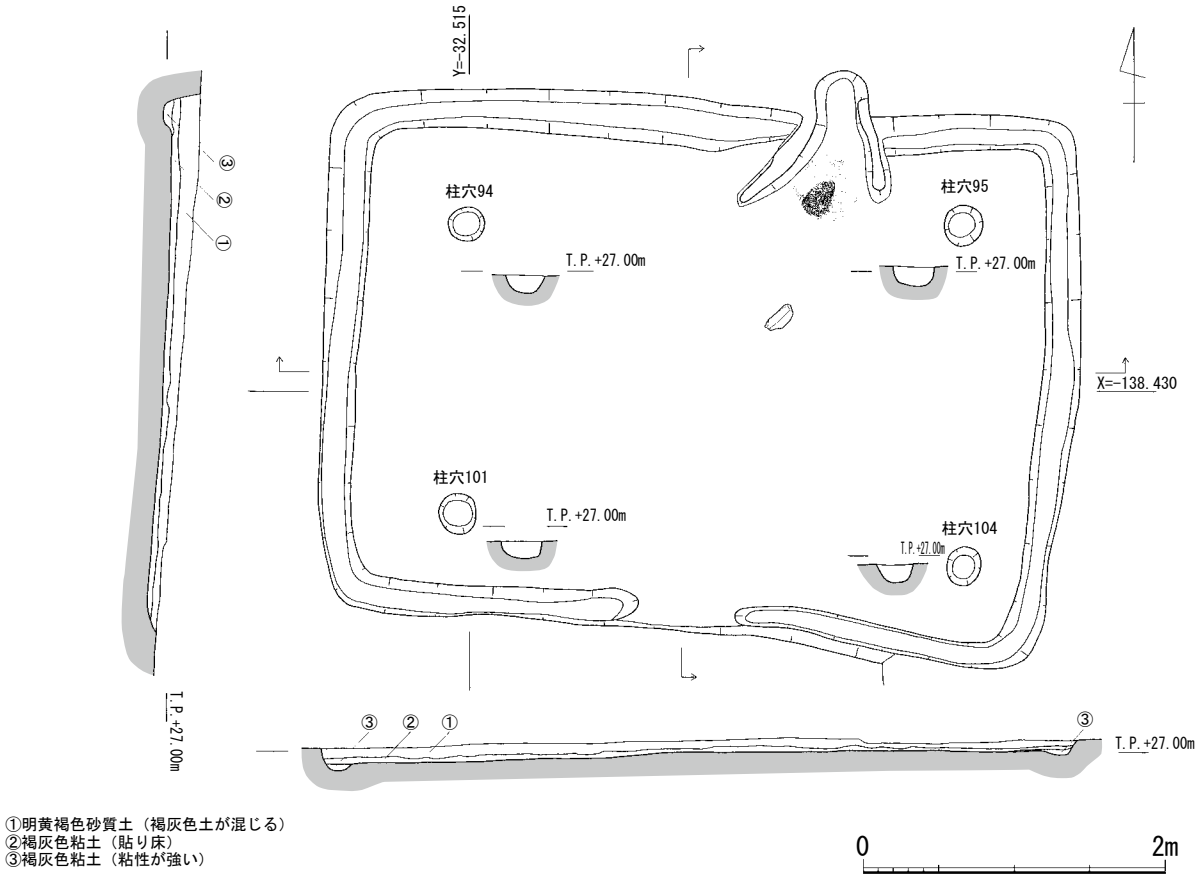
北辺の中央より東寄りにカマドが造り付けられている。北側に延びる煙道部も一部遺存していた。カマドは、検出された燃焼室の端から煙道部の端まで約90㎝を測る。

燃焼室は、長さ65㎝、幅は壁面あたりで25㎝前後、床面とほぼ同じレベルである。住居跡の壁面から延びる袖は最大幅約40㎝、高さ約５～８㎝、東側は長さ約55㎝、西側は長さ約70㎝を測る。煙道部は長さ約30㎝、最大幅約35㎝を測る。

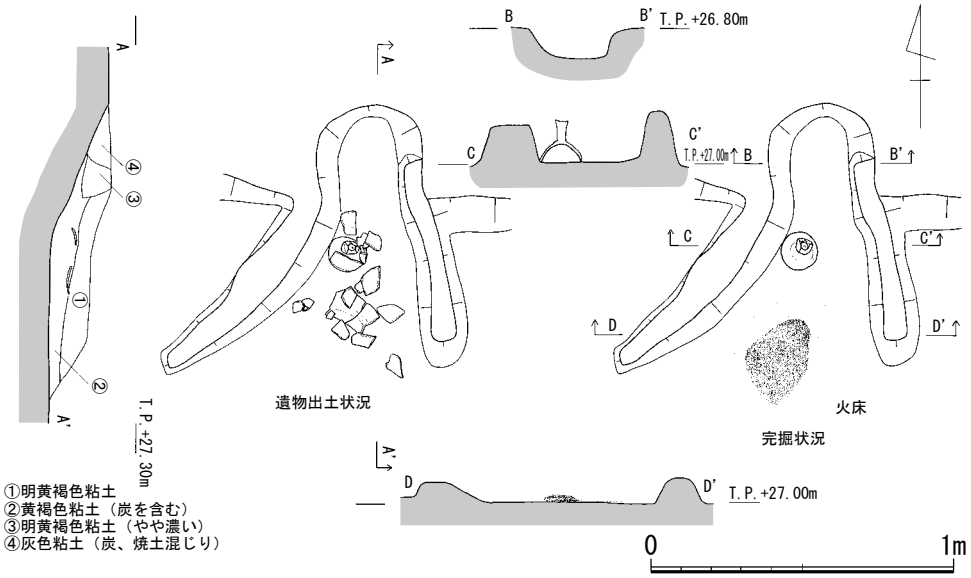
燃焼室には上下２層が堆積しており、下層上部からは、廃棄された土師器片が検出された。燃焼室の床面は焼けて赤変しており、とりわけ焚口部付近（火床）は強く焼けている。燃焼室の最奥部の東側には支脚として利用した脚部を欠いた土師器の高杯が伏せた状態で据えられていた。

煙道部は壁面の外側30㎝あたりまで遺存しており、埋土は炭や灰を多く含んでいた。

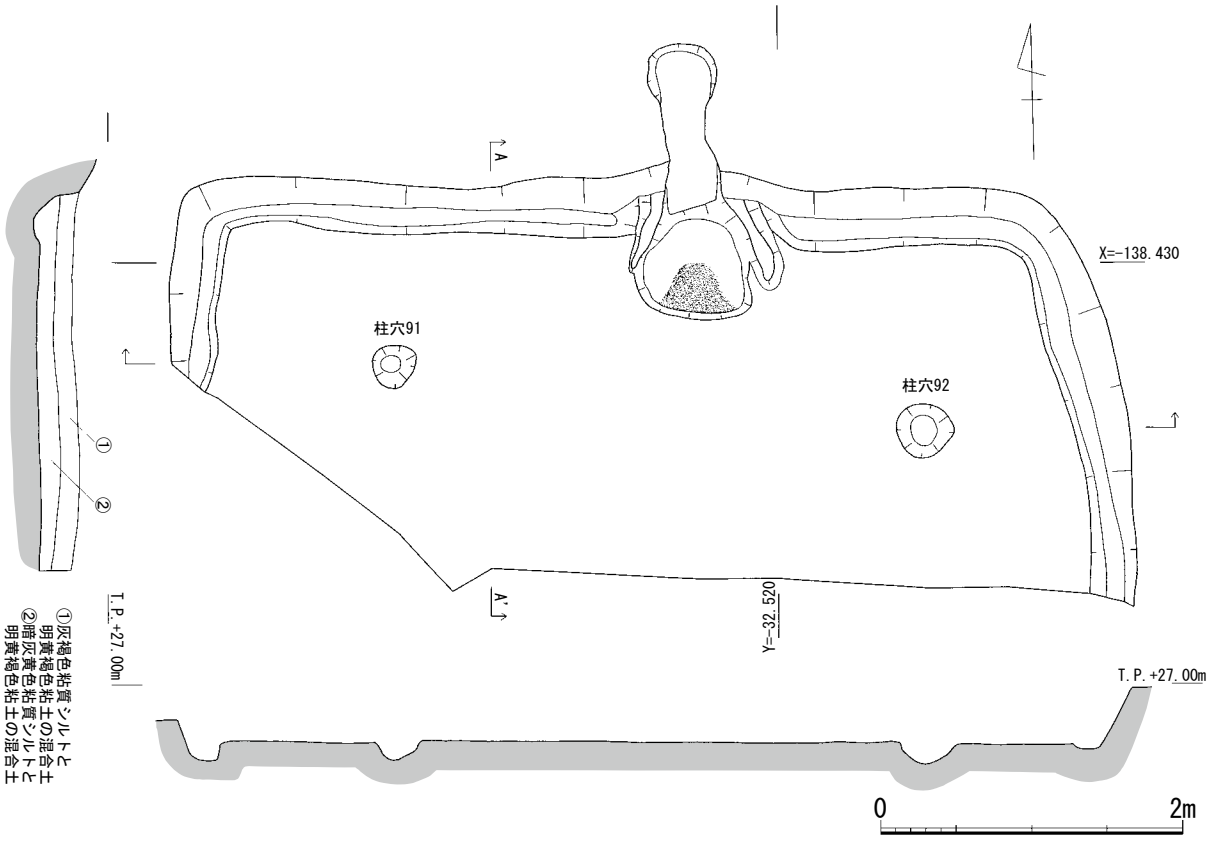
竪穴住居跡84（第８・第９図・図版４）　調査区南西部で検出した。当該遺構の南部は調査区外へ延びる。東西約6.4ｍ、南北（現在長）約2.5ｍ、深さ0.25ｍ前後を測る。ほぼ正方位に主軸をもつ。覆土は上下２層に分かれる。周囲に幅25～40㎝の壁溝が巡る。主柱穴２個を検出した。東部の柱穴92は直径40㎝前後、深さ約12㎝を測る。西側の柱穴91は、直径30㎝前後、深さ約12㎝を測る。主柱穴の覆土はいずれも１層で黄橙色粘質土である。



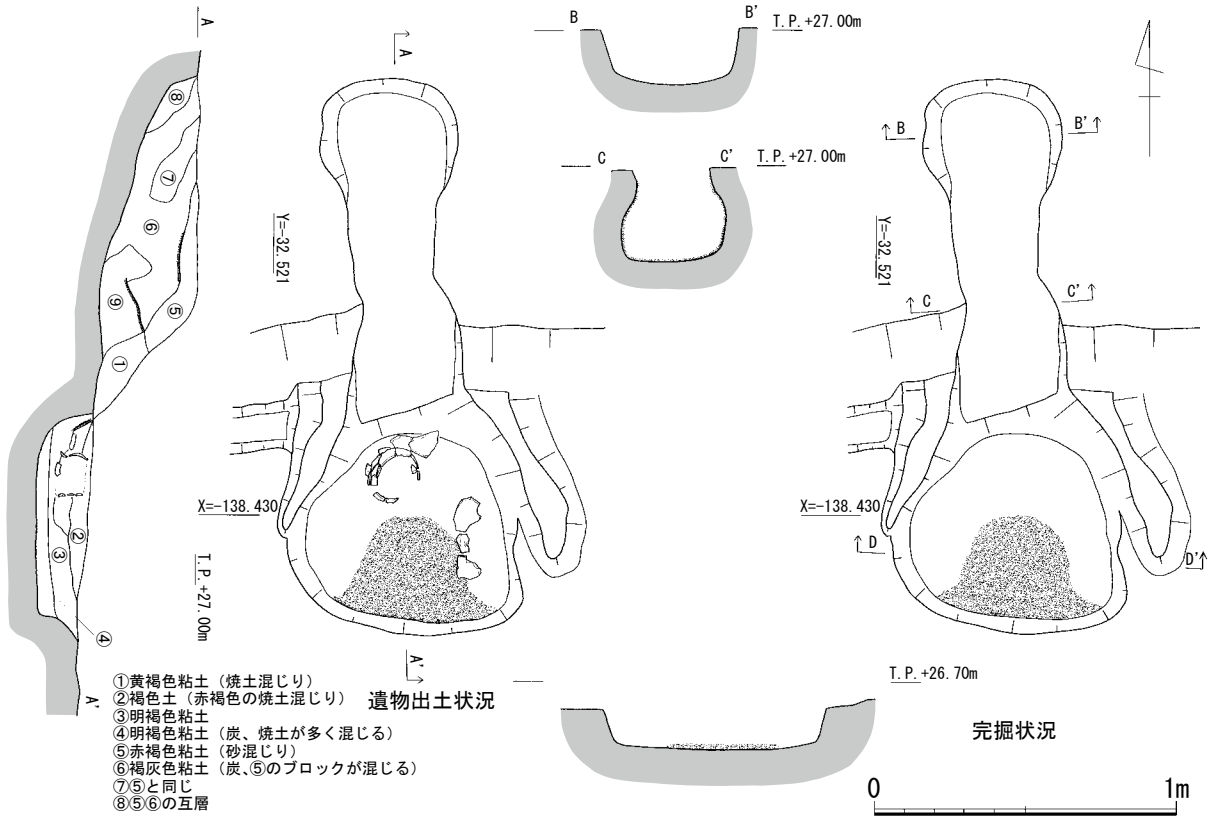
第６図　竪穴住居跡88　平面・断面図



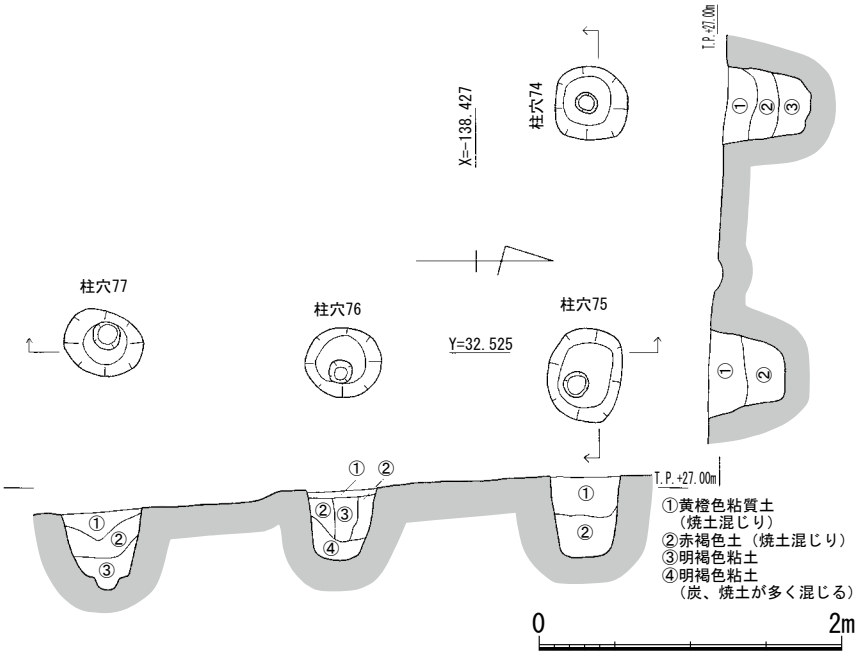
第７図　竪穴住居跡88　カマド平面・断面図



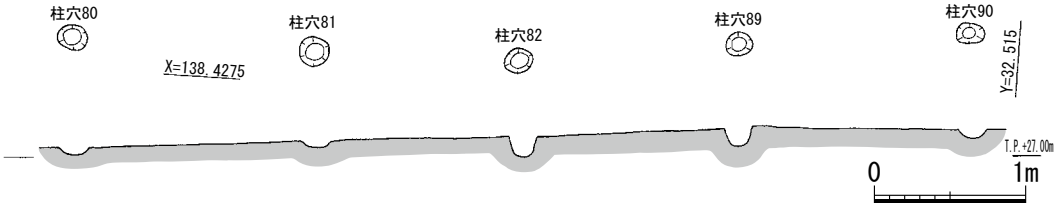
第８図　竪穴住居跡84　平面・断面図



第９図　竪穴住居跡84　カマド平面・断面図



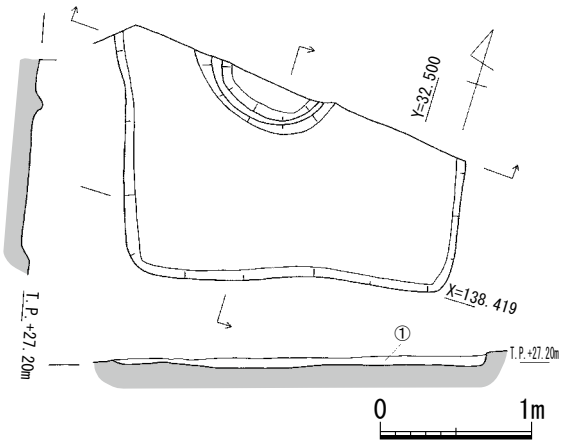
第10図　掘立柱建物平面・断面図



第11図　柱列１（柱穴80～82・89・90）平面・断面図

北辺の中央よりやや東寄りにカマドが造り付けられている。北側に延びる煙道部も良好に遺存していた。カマドは、検出された燃焼室の端から煙道部の端まで約185㎝を測る。燃焼室は、長さ65㎝、幅75㎝前後、床面から約13㎝掘り込まれている。住居跡の壁面から延びる袖（最大幅約30㎝、高さ約３㎝）の一部を検出した。煙道部は長さ約115㎝、最大幅約45㎝を測る。燃焼室の内部には、固く焼き締まった面が２面検出された。地山面では焚口部で幅約50㎝、長さ約40㎝の範囲で赤く焼き締まっていた。さらに１層上面も下面とほぼ同じ範囲が赤く焼き締まっており、この面からわずかに浮いて底部を欠いた土師器の甕を逆転して据えられていた。また、この周囲から土師器の高杯などの破片が出土している。いずれも廃棄時のものである。

煙道部は壁面付近で幅約35㎝、深さ約30㎝を測る。先端部では幅約45㎝、深さ約20㎝を測る。埋土は炭や灰を多く含んでおり、天井部の一部と思われる焼け締まった土も確認できた。



第12図　竪穴状遺構32平面・断面図

掘立柱建物（柱穴74～77）（第10図・図版６）　主軸をおおむね正方位にとる。直径0.5ｍ前後、深さ0.5

～0.6ｍ前後を測る比較的大型の柱穴４個を検出した。平面形は円形もしくは隅丸方形を呈する。覆土は２～４に分層できる。南北方向の３個の柱穴は1.6m前後の距離をもって並ぶ。東西方向の２個の距離は約1.8ｍを測る。調査区外、南西方向へ延びる。いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。

柱列１（柱穴80～82、89・90）（第11図）　２棟の竪穴住居跡の北側で５個の柱穴で構成される柱列を検出した。柱穴は東西方向に一直線にはならず、柱穴81・82にはやや南側に位置する。柱穴は直径20㎝前後、深さ５～15㎝を測る。遺構から出土した遺物はなく時期は不明。

柱列２（柱穴96～99・106）（第５図）　竪穴住居跡88と重複する東西方向の柱列。５個の柱穴で構成される。東端が柱穴96、西端が106である。柱穴は東西方向に一直線に並ぶ。柱穴96と97、柱穴99と100の間の距離は、約1.2mを測るが、他の柱穴間の距離は約1.0ｍを測る。柱穴は直径35～50㎝、深さ10㎝前後を測る。遺構から出土した遺物はなく時期は不明。

また、調査区の東端部においても竪穴状遺構や土坑が遺存していた。

竪穴状遺構32（第12図・図版５）　一辺約2.2ｍを測る竪穴状の遺構。北部は調査区外へ延びる。深さ10㎝前後、覆土は１層のみである。遺構のほぼ中央部に、上幅約５㎝、下幅約20㎝、高さ約５㎝の土手状遺構で取り囲まれた直径50㎝前後の炉跡を検出した。主柱穴は検出されなかった。覆土から土師器や須恵器の小片が数点出土したが、時期を特定することはできない。しかし遺構の形状などから竪穴住居との関連が想定できる。

中央に炉をもつ小形の竪穴である本遺構の性格を明確にすることはできない。竪穴住居で構成される集落においては、居住ではなく何らかの作業の場として活用された可能性が想定できるのみである。また、屋根を支える柱跡などが遺構内で検出されていないことからは、関連する遺構が周囲に広がっていたことも想像される。

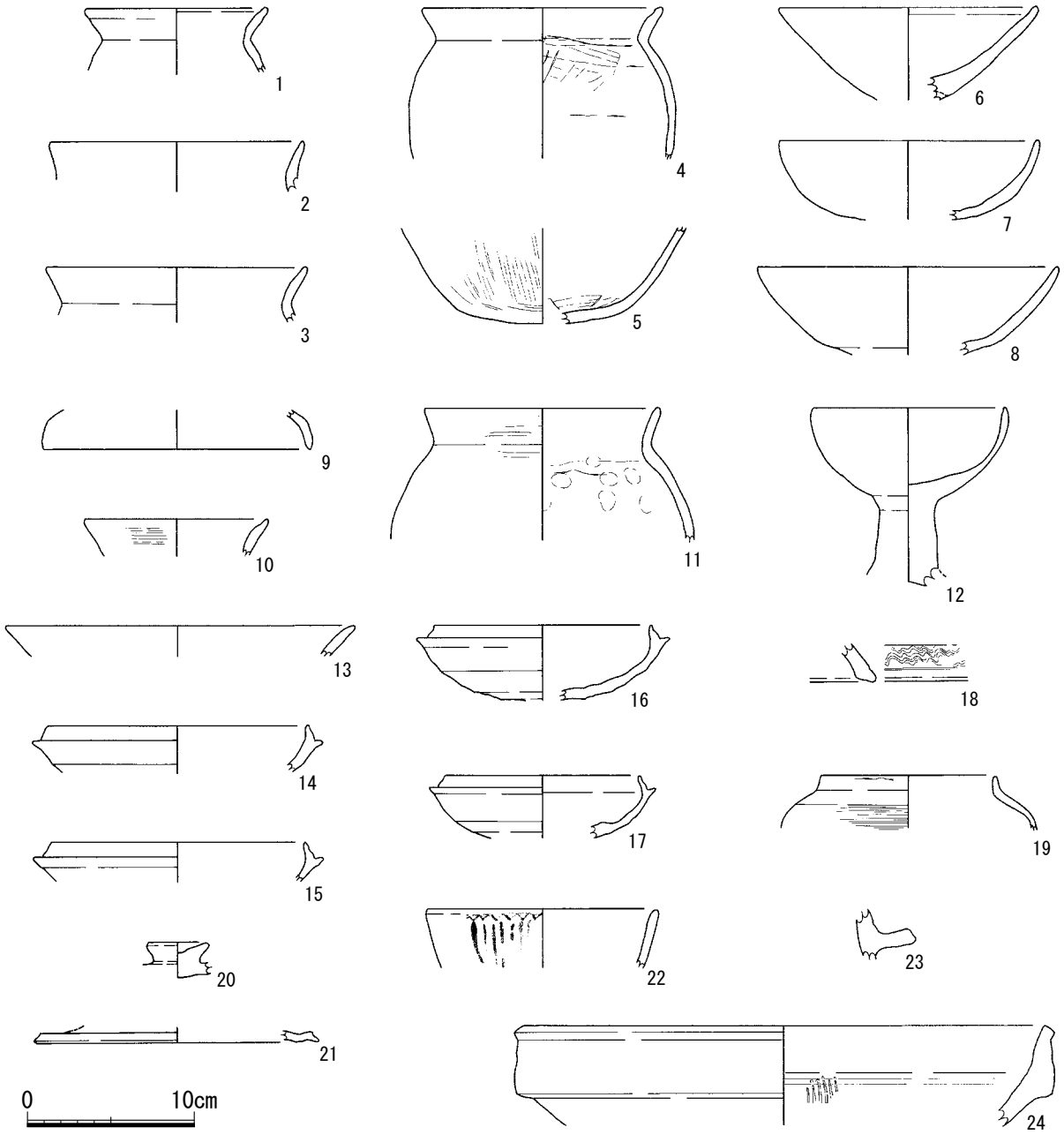
土坑33（第５図）　直径１ｍ前後、深さ10㎝前後の円形に復元できる土坑。淡黄橙色粘質土を覆土とする。

第３節　出土した遺物

本調査区において出土した遺物の量は少ない。二面の遺構面を覆う土層には包含される遺物のほとんどは土師器などの小片であった。しかし遺構覆土からはある程度まとまった遺物が出土している。

本調査区で出土した遺物は、大きく二つの時期にわけられる。中世の時期のもの、古墳時代後期のものである。さらに遺構覆土などに混入していた旧石器も存在する。

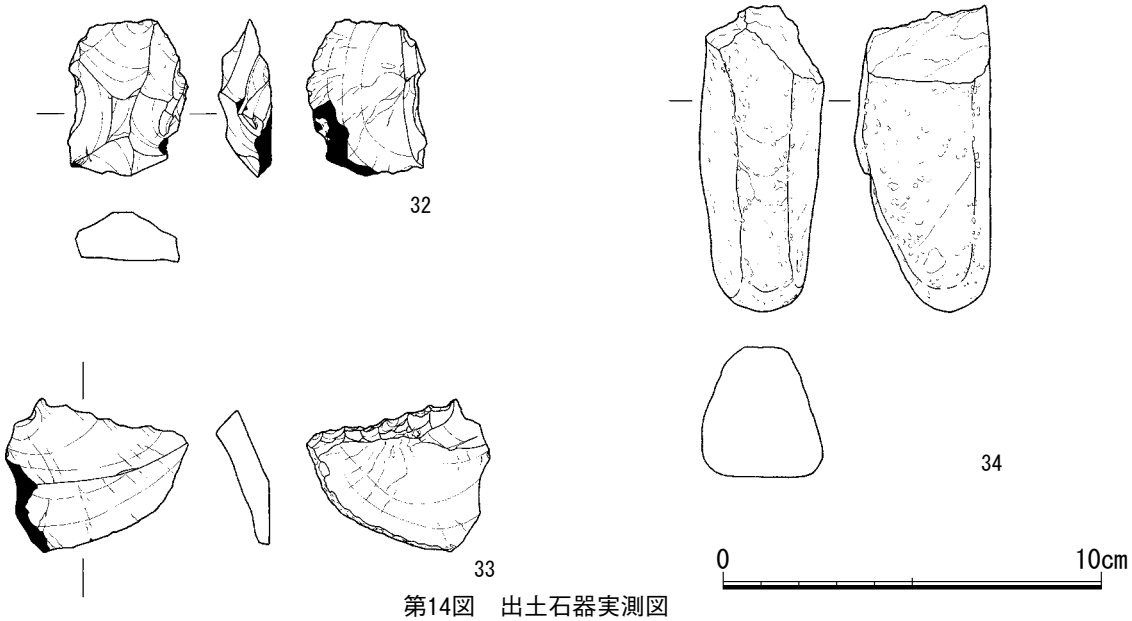
竪穴住居跡88カマド出土土器（第13図・図版７）　９は須恵器蓋杯の蓋。横ナデで調整。内外面灰白色を呈す。胎土は密で焼成良好。10は土師器甕。外面ハケメ、内面ヨコナデ。外面に赤褐色、内面にぶい黄橙色を呈す。胎土ハ白粒石やクサリ礫、金雲母などを含みやや密。焼成良好。11は、土師器甕。内外面ヨコナデ。内面にユビオサエの痕跡。内外面にぶい褐色を呈す。胎土ハ白粒石や金雲母などを含みやや粗、焼成は良好。12はカマドの支脚に利用された高杯。器面が荒れ調整不明。外面浅黄色、内面にぶい黄橙色を呈す。胎土は白粒石やクサリ礫、金雲母などを含みやや粗、焼成は良好。13は土師器甕。器面が荒れ調整不明。内外面にぶい黄橙色を呈す。胎土は白粒石やクサリ礫、金雲母などを含み密、焼成は良好。25・26は土師器甕の口縁部の破片。



第13図　出土土器実測図

竪穴住居跡84カマド出土土器（第13図・図版７・８）　カマドの内部に廃棄されていた土器である。１～５は土師器甕。１～３は内外面はヨコナデで調整。外面がにぶい黄橙色、内面は橙色を呈す。焼成はいすれも良好で、胎土ハ白粒石やクサリ礫、金雲母などを含みよく類似する。４は内外面ともにヨコナデ調整。内外面ともにぶい黄橙色を呈す。５は甕底部片。外面にハケメ、内面には工具によるナデ痕跡がのこる。内外面ともにぶい黄橙色を呈す。６～８は高杯の杯部。７は杯の可能性もある。６は内外面とも明赤褐色を呈す。７は外面浅黄橙色、内面灰黄色を呈す。８は内外面とも橙色を呈す。胎土に白粒石やクサリ礫、金雲母などを含み類似する。

31は植物遺体を含む焼土塊。カマドの壁の一部である。



第14図　出土石器実測図

遺物包含層等出土土器（第13図・図版８）　遺物包含層や遺構覆土に混入した土器類は、６世紀後半、８世紀、中世の三つの時期のもので構成される。

14～19は竪穴住居が造られた６世紀後半の土器である。

14～17は須恵器蓋杯の杯部。14～16はいずれも内外面灰色から灰白色を呈し、胎土は密で焼成は良好。17のみ焼成が良好堅緻で外面はオリーブ黒色を呈す。立ち上がりの部分の形態に差異が認められ、時期さが存在することが確認できる。

18は外面に波状文を施す器台の小片である。内外面灰色を呈し、緻密な胎土であり焼成は良好である。

19は須恵器壺。短く立ち上る口縁部から体部の破片である。体部外面にカキメを施す。内外面オリーブ灰色を呈し、胎土は密で焼成は良好。

20・21は８世紀の土器である。20は須恵器蓋杯の蓋部のつまみ。扁平で中央が大きくくぼむ。内外面灰白色を呈し、胎土は密で焼成は良好。21は須恵器蓋杯の蓋部端部片。内外面灰色を呈し、胎土は密で焼成良好。

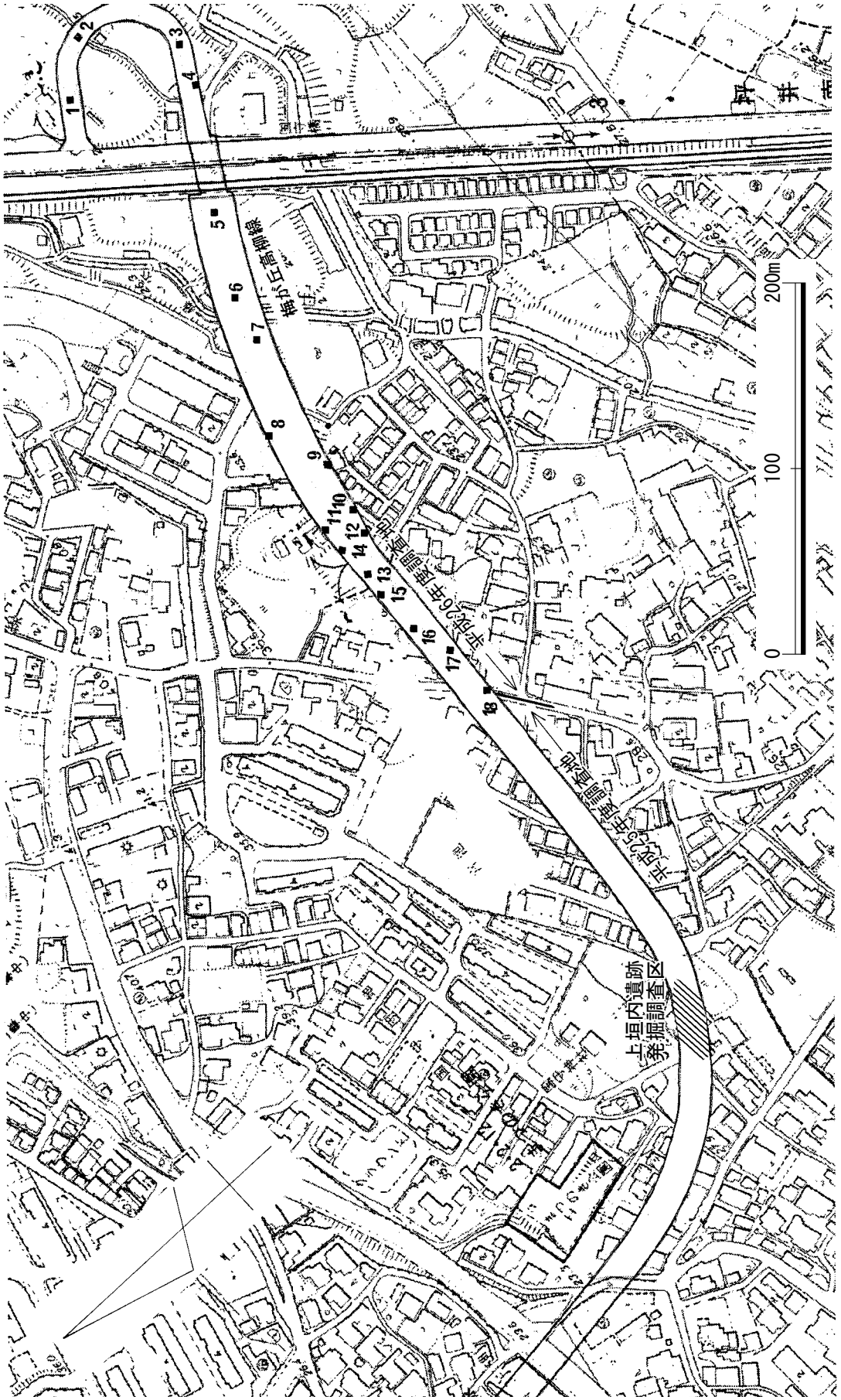
22～24は中世の土器である。22・27～29は青磁碗の体部片、23は土師器羽釜の鍔部片。内外面灰色を呈す。24は陶製すり鉢片。内外面橙色を呈す。30は土製支脚片。

出土した石器（第14図・図版７・９）　旧石器に属する遺物も遺構覆土や遺物包含層から出土している。32は多方向から打撃を与え作業面を調整剥離したサヌカイト製の石核である。33は翼条剥片の一部。下辺に自然園を残すことから製作過程の初期のものの可能性が高い。他にも風化が著しいサヌカイトの石片の出土がみられた（35～37）。

34は竪穴住居跡88の床面付近から出土した石器。砥石の可能性が高い。

第４章　上垣内遺跡・国守遺跡の確認調査

平成26年度は、現在の東高野街道より東側の確認調査を実施した。今年度の調査範囲は、住宅開発された丘陵部分とJR学研都市線や主要地方道枚方富田林泉佐野線が南北に走る大きな谷地形で構成され



第15図　上垣内遺跡・国守遺跡確認調査トレンチ配置図

る。基本的に丘陵部分が上垣内遺跡、谷部分に国守遺跡が所在する。

なお、平成25年度に実施した確認・試掘調査の調査トレンチの設置箇所とその概要については「上垣内遺跡等」(『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』18、2014年）を参照のこと。

確認トレンチの設置（第15図）　調査は18か所の確認調査トレンチを設置して実施した。国守遺跡が６か所（第１～第６トレンチ)、上垣内遺跡が12か所（第７～第18トレンチ）である。

府道枚方富田林泉佐野線の東側は、北東から南西に向かう丘陵の斜面を造成し耕作地とした場所である。ここに第１～第４トレンチを設置した。

第１トレンチ（第16図）　厚さ約50㎝の盛土と約20㎝の耕作土を除去すると明黄褐色土と褐灰色土の混合土（第１層）である。厚さ15～20㎝の第１層を除去すると中世の遺構面である。その下層にシルト系の土砂が堆積しており、中世面から約70㎝下部で古墳時代の遺構面を検出した。

第２トレンチ（第16図）　トレンチの大部分は攪乱されていたが、一部で現地表面から下方約1.2ｍで安定した砂質の３層の土層を検出。それらを除去すると古墳時代の遺構面を検出した（現地表面下約1.8ｍ)。ピットなど検出した。

第３トレンチ（第16図）　地表面下約1.1ｍまで７層の土層を掘削した。第３層までが黄色を呈する土層。それ以下はシルト系の土層である。第４層の上面が中世の遺構面であり浅い落ち込み状の遺構を検出。第７層上面が古墳時代の遺構面である。不整形な落ち込みなどが存在した。

第４トレンチ（第16図）　現地表面下約1.1ｍまで掘削。盛土や耕作土を取り除くと礫層や砂層などが検出される。平坦地を造成する時に上層を大きく削平したものと推測される。

主要地方道枚方富田林泉佐野線の東側の地区においては、部分的に後世大きく削平されている可能はあるが、基本的に古墳時代と中世の遺構面が広がっていると考えられる。

JR学研都市線の西側の平坦地に第５～第７トレンチを設置した。

第５トレンチ（第16図）　厚さ50㎝前後の耕作土、床土を取り除くと中世の遺構面が検出される。大きな落ち込みを検出。その下層はシルト～砂の自然堆積層である。現地表面下約1.1ｍまで掘削。

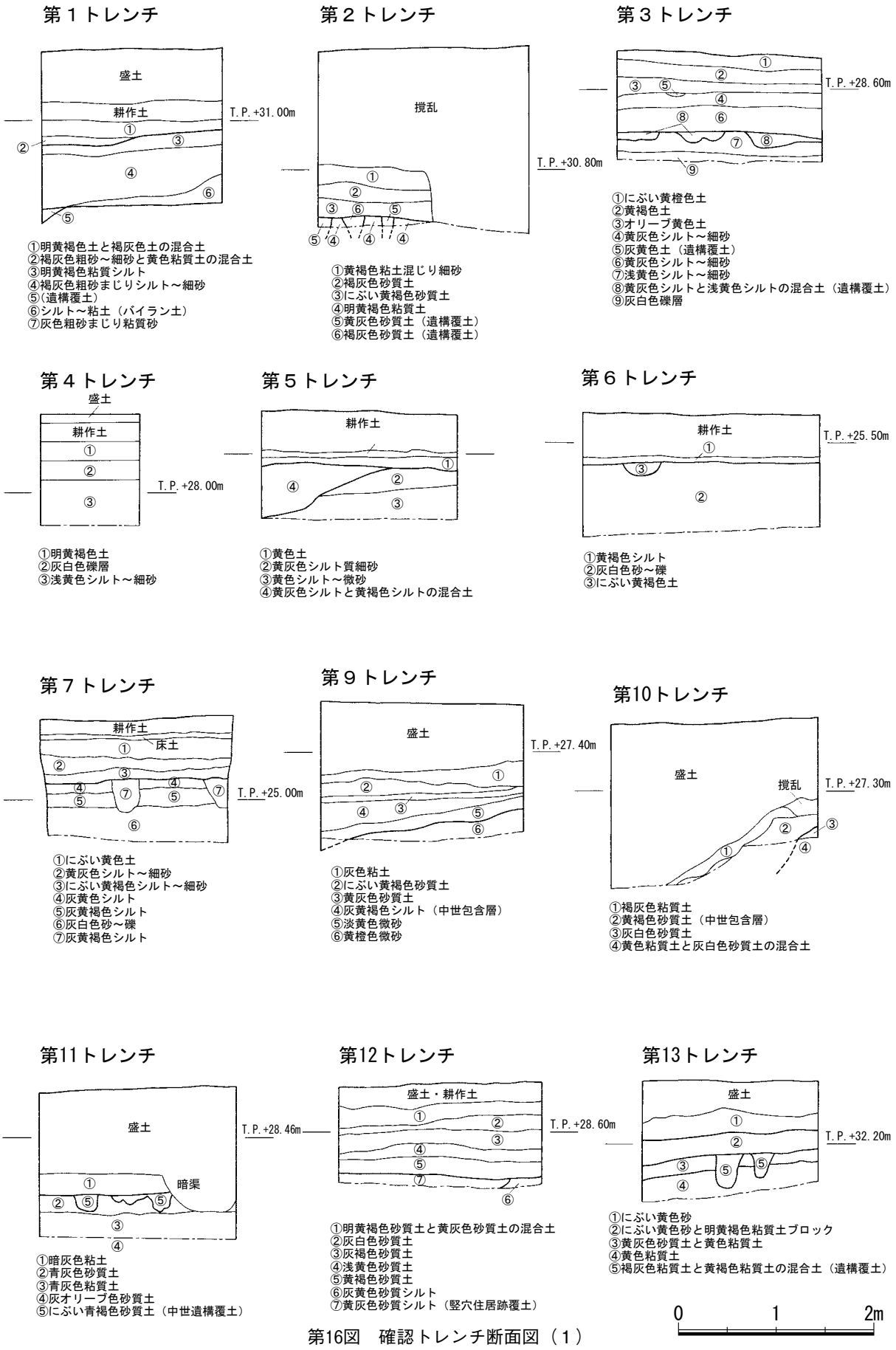
第６トレンチ（第16図）　厚さ約40㎝の耕作土と厚さ10㎝程度の第１層（厚さ約10㎝）を取り除くと中世の遺構面が検出される。浅い落ち込みなど遺存。以下は砂～礫の自然堆積層。現地表面下約1.2ｍまで掘削。

第７トレンチ（第16図）　讃良川に合流する用水路の西側に当たる。厚さ20㎝前後の耕作土と床土、厚さ40㎝前後を測るシルト系の土層（第１～第３層）を除去すると中世の遺構面である。ピットなどを検出。以下の土層はシルト～粗砂で構成される自然堆積層である。現地表面下約1.2ｍまで掘削。

第５～第７トレンチでは自然堆積層の上面に比較的安定した中世の遺構面を検出できた。JR学研都市線の複線化工事に先立つ発掘調査の結果から想定された国守遺跡の中世集落の一部が当該地点にも広がっていることが確認できた。

第８～第18トレンチは丘陵部に設置した。本来丘陵の南向きの斜面であったが、切土と盛土による宅地造成により大きく地形が改変されている。

第８トレンチ　今回の確認調査のトレンチ設置地点の最高所に当たる。南へ延びる尾根の先端部である。表土を除去するとただちに地山面が検出された。遺構・遺物は確認できなかった。当該地点は造成



第16図　確認トレンチ断面図（１）

時に大きく削平されたと推測される。しかし、付近に盛土によって造成された地点が存在する可能性も否定できない。

第９・第10トレンチは第８トレンチの下方、丘陵の裾に比較的近い位置に当たる。

第９トレンチ（第16図）　厚さ60～70㎝の盛土が施されている。粘土系の第１層、砂質系の第２・第３層の下層が中世の包含層（第４層）であり、本来の地形に沿って斜めに堆積している。現地表面下約1.5ｍまで掘削。

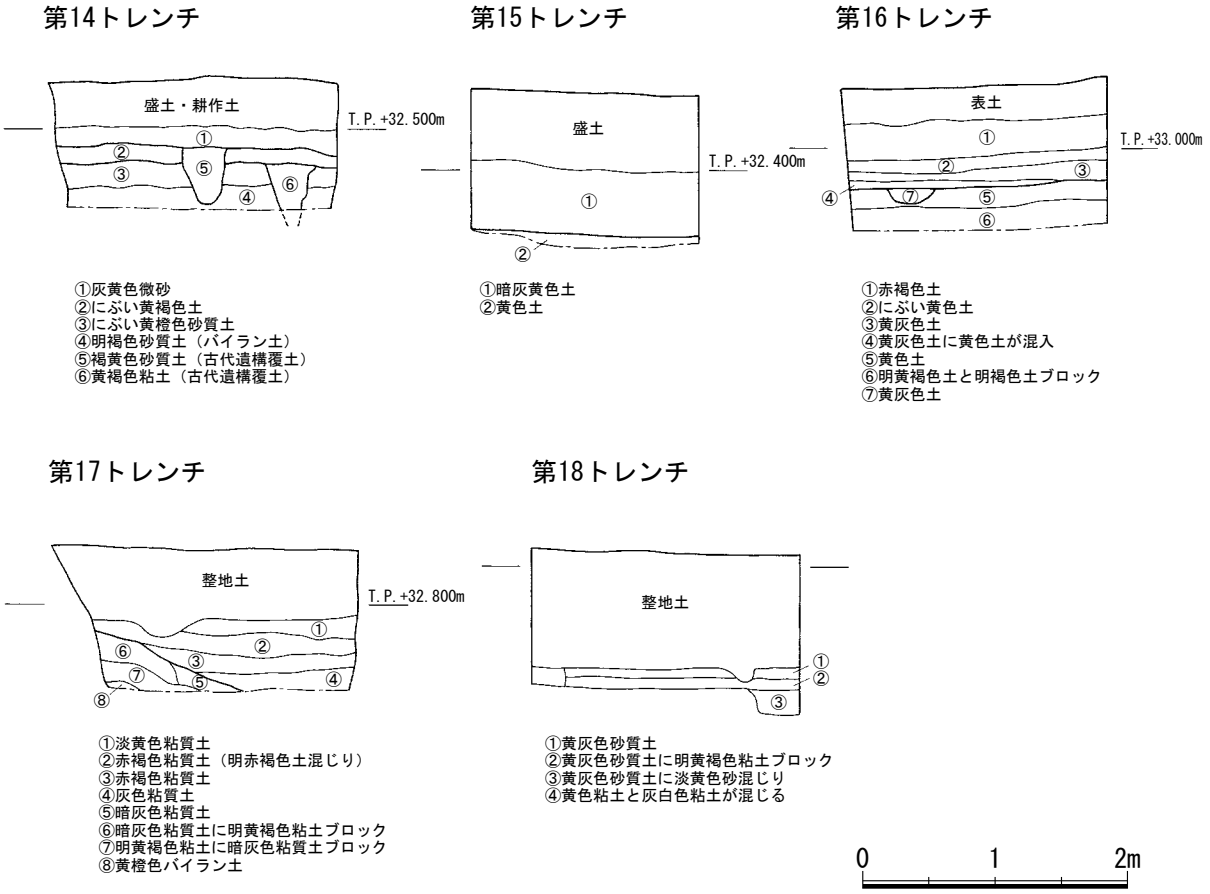
第10トレンチ（第16図）　丘陵の斜面を検出。現地表面下約1.7ｍまで掘削。トレンチの北部で中世の包含層と大きく傾斜する地山面を検出。

第11～第17トレンチは、東から西へ標高が高くなっていく造成された住宅地の区画ごとに設定した。

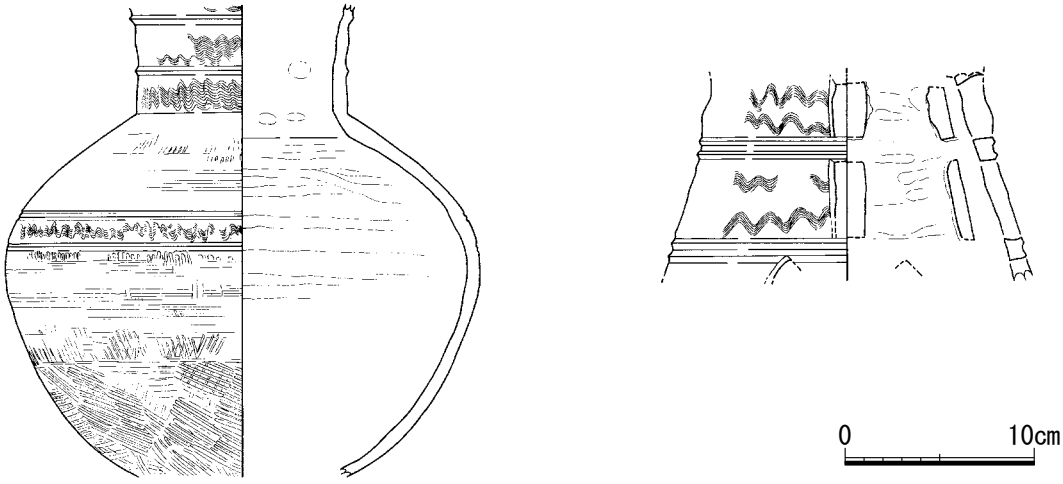
第11トレンチ（第16図）　厚さ約90㎝の盛土が施されている。第１層を除去した第２層上面が中世の遺構面である。ピットや落ち込みを検出。現地表面下約1.3ｍまで掘削。

第12トレンチ（第16図）　盛土・耕作土、第１～第３層まで厚さ約70㎝の土層を取り除いた第４層上面が中世の遺構面である。さらに第４・第５層を除去した第６層上面が古墳時代の遺構面である。竪穴住居跡の可能性がある遺構の一部を検出。

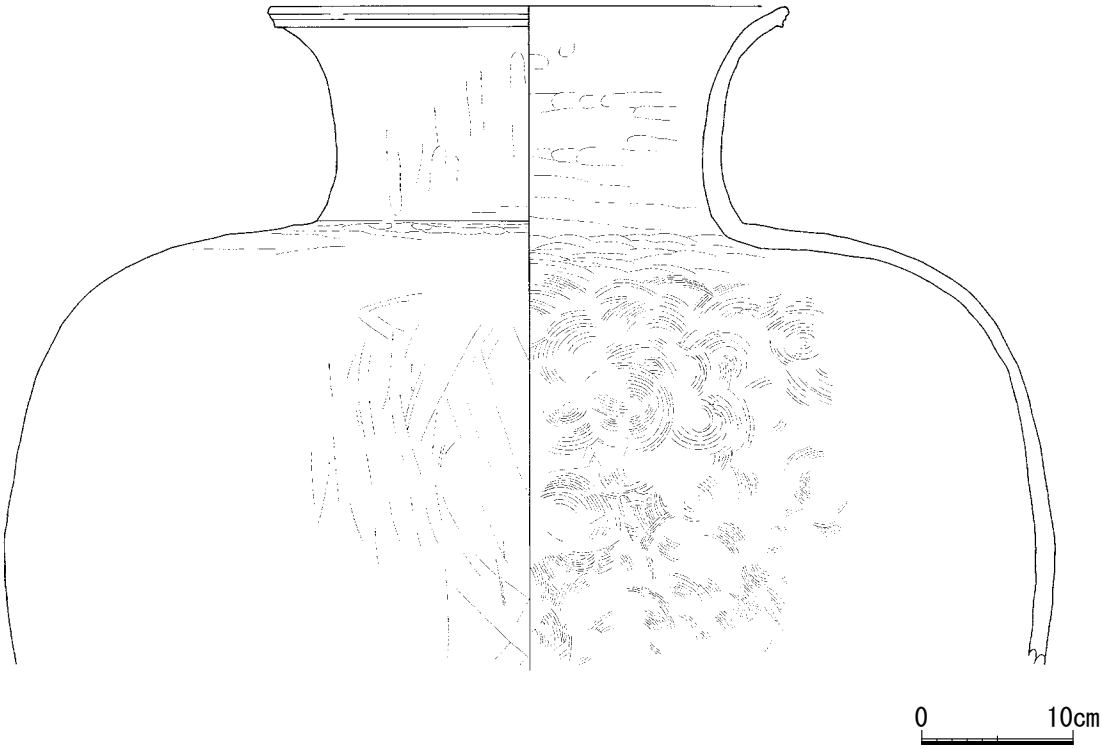
第13トレンチ（第16図）　盛土と第１層まで厚さ約50㎝の土層を取り除いた第２層上面が中世の遺構面である。さらに第３層上面が古代の遺構面であり、ピットなどが検出された。さらに第４層上面が古墳時代の遺構面の可能性がある。現地表面下約1.2ｍまで掘削。



第17図　確認トレンチ断面図（２）



第18図　第17トレンチ出土土器（１）



第19図　第17トレンチ出土土器（２）

第14トレンチ（第17図）　盛土と第１層まで厚さ約50㎝の土層を取り除いた第２層上面が中世の遺構面であり、ピットを検出。さらに第３層上面が古代の遺構面であり、ここでもピットが検出された。さらに第４層上面が古墳時代の遺構面である。現地表面下約1.0ｍまで掘削。

第15トレンチ（第17図）　盛土と第１層まで厚さ約1.1ｍの土層を取り除いた第２層上面が古墳時代の遺構面である。現地表面下約1.2ｍまで掘削。

第16トレンチ（第17図）　盛土と第１～第４層まで厚さ約80㎝の土層を取り除いた第５層上面が中世の遺構面であり、落ち込みなどを検出した。さらに第６層上面が古墳時代の遺構面である。現地表面下約1.1ｍまで掘削。

第17トレンチ（第17・第18・第19図・図版６・10）　厚さ約50㎝の盛土を取り除いた第１層上面が中

世の遺構面である。第１・第２層を除去した下層の第３・第４層が古墳時代の遺物を包含する層である。この２層は斜めに堆積している。またこの土層からは須恵器の大型甕、広口壷、器台が出土している。

大型甕（38）は、口径約34㎝、現存している部分の器高約44㎝を測る。広口壷（39）は、現存器高約25㎝を測る。器台（40）は体部の破片である。この３点の遺存状況の良い遺物が一括で出土していることから、第３・第４層が削平された５世紀の小形古墳の周溝の覆土である可能性が高い。

第18トレンチ（第17図）　厚さ約80㎝盛土が施されている。厚さ20㎝程度の第１・第２層を取り除いた第３層上面が中世の遺構面である。現地表面下約1.2ｍまで掘削。

小　結　主要地方道枚方富田林泉佐野線の東側の地区（第１～第４トレンチ）では、古墳時代と中世の遺構面が広がっていると判断される。

JR学研都市線と丘陵裾部の地区（第５～第７トレンチ）では、河川による自然堆積層の上に中世の遺構面が遺存していた。

丘陵の尾根筋に設定したトレンチ（第８トレンチ）では、この地点が大きく削平を受けていることが明らかになった。しかし近接して遺構面が盛土の下に埋没している可能性を否定できない。

丘陵裾部の地区（第９・第10トレンチ）では、丘陵斜面が検出されたが、中世の遺構面も遺存していた。

丘陵上に展開する地区（第11～第18トレンチ）では、中世と古墳時代の遺構面が広がり、一部古代の遺構面も確認できた。また第17トレンチでは５世紀の小形古墳の周溝の一部が検出されており、付近の同様な古墳がさらに分布している可能性が想定される。

今年度確認調査を実施した上垣内遺跡、国守遺跡においては、地点ごとに様相を違えるものの、全面に埋蔵文化財の包蔵が確認できた。

第５章　まとめ

上垣内遺跡の発掘調査　上垣内遺跡の発掘調査においては、中世と古墳時代後期のふたつの遺構面を検出した。

中世の遺構面（第１面）では、耕作溝などを検出した。この時期すでに地形を改変し丘陵斜面を造成して平坦な耕作地を形成していたことが判明した。詳細に時期を決定することはできないが、すでに一帯の丘陵の南側斜面などが広く耕地（畑地）として利用されていたことが想定できる。

古墳時代後期の遺構面（第２面）では、調査南側の丘陵の緩やかな傾斜地において２棟の竪穴住居跡を検出した。いずれもカマドを造りつけていた。高宮遺跡では古墳時代中期のカマドをもつ竪穴住居の集落が検出されているが、後期のものは存在しない。この時期、多くの集落では掘立柱建物が主流となっているが、本遺跡ではカマドをもつ大形の竪穴住居で構成されていることは特記される。

また中央に炉をもつ小形の竪穴状遺構は住居とは考えられない。何らかの作業の場であると想定されるが、本遺跡における古墳時代後期のムラの様相の一部を示すものである。

大形の掘立柱建物跡の一部を検出した。柱穴の平面形に方形の指向を読み取れるため、竪穴住居跡よ

りも新しい時期のものである可能性が高い。高宮遺跡、太秦遺跡、大尾遺跡など検出された古代の掘立柱建物群との関連が想定される。断片的な資料であるが、上垣内遺跡においてさらにもうひとつ新しい時期の遺構が展開するのであろうか。

後世の削平や攪乱によって今回の調査においては、限定された範囲において遺構を検出したのみである。それにもかかわらず、古墳時代後期の集落跡の一部、古代のものと推測される掘立建物跡、中世の耕作地など多様な時期の遺構を検出することができた。巨大な範囲を持つ上垣内遺跡の片鱗を今回の調査においてうかがうことができた。

上垣内遺跡・国守遺跡の確認調査　丘陵部に立地する上垣内遺跡においては、古墳時代と中世の遺構面もしくは遺物包含層がほとんどの調査トレンチで確認できた。また一部では古代の遺物包含層も遺存しており、この時期の遺構も存在する可能性が高い。とりわけ確認調査範囲の西端あたりでは５世紀の小形古墳の周溝の一部が確認され、周辺に同様な古墳の分布が予想される。

丘陵に刻まれた谷地形に広がる国守遺跡の範囲では､JR学研都市線の複線化工事の時の調査成果を裏付けるように中世の遺構面もしくは遺物包含層の広がりが確認できた。また、遺跡の東部では古墳時代の遺構面もしくは遺物包含層が確認されており、同時期の遺構の存在も予想される。

平成26年度に実施した上垣内遺跡・国守遺跡において確認調査を実施した範囲において工事を実施する場合は発掘調査が必要となると判断される。

報　告　書　抄　録

ふりがな	かみがいといせき
書　　名	上垣内遺跡
副　書　名	都市計画道路梅が丘高柳線の建設に伴う発掘調査
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2015－4
編集著者名	小林義孝
編集機関	大阪府教育委員会
所　在　地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目　℡06－6941－0351（代）
発行年月日	2015年11月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
上垣内遺跡（かみがいとい せき）	大阪府寝屋川市（おおさかふねやがわし）明和二丁目（めいわにちょうめ）	27231	65	34°45′08″	135°38′43″	20140701～20141111	450㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上垣内遺跡	集落跡	古墳時代・中世	カマドを付す竪穴住居跡	土師器 須恵器	当該遺跡においてはじめて顕著な遺構を検出

要　約	寝屋川市の東南部の丘陵部において古墳時代後期の集落の一部を発見。

大阪府埋蔵文化財調査報告2015－4

上 垣 内 遺 跡

－都市計画道路梅が丘高柳線の建設に伴う発掘調査－

発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571　大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06－6941－0351（代表）

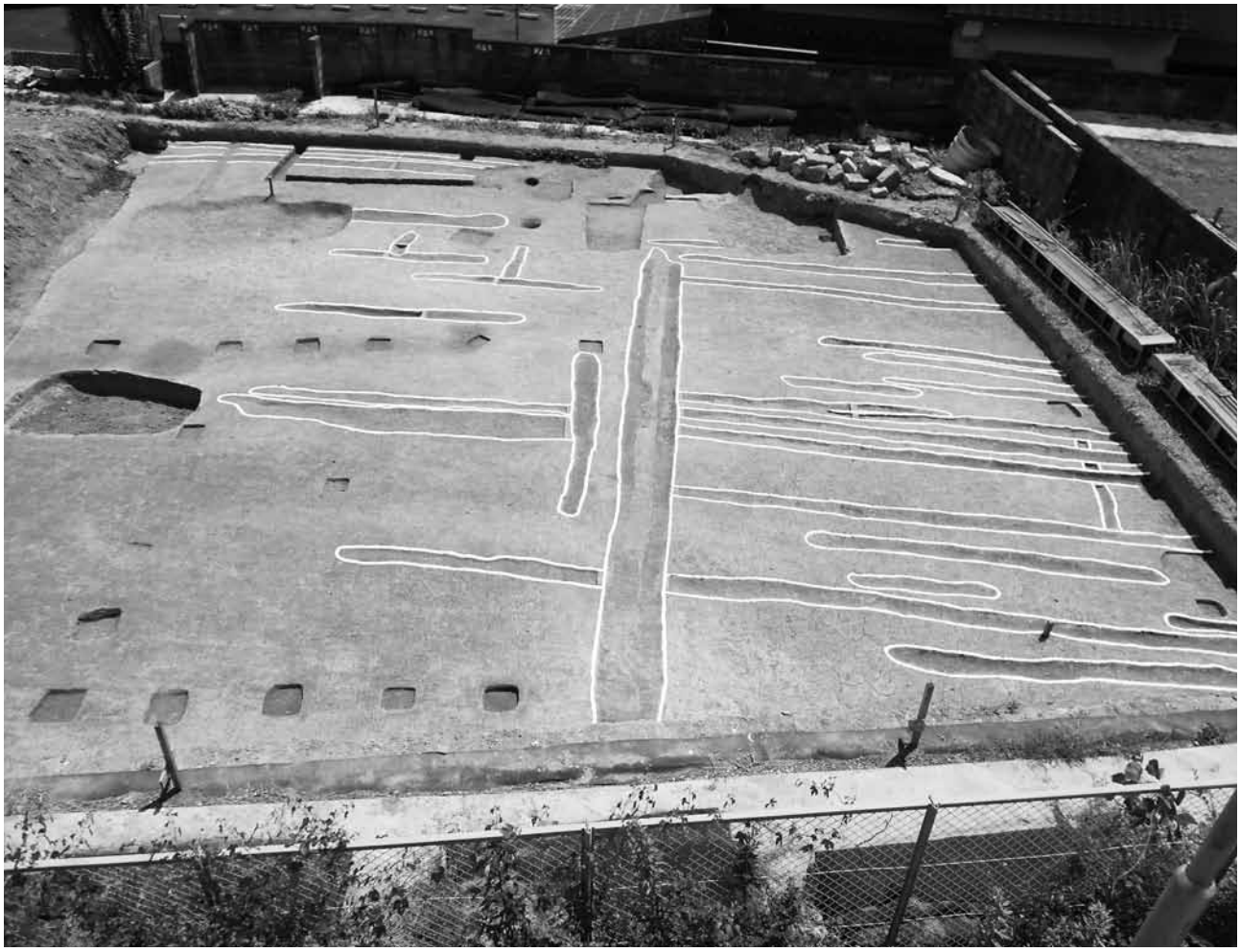
発行日　平成27年11月30日

印　刷　株式会社　近畿印刷センター
〒582－0001　柏原市本郷５丁目６番25号

図　　版

図版1　第1面（中世）全景

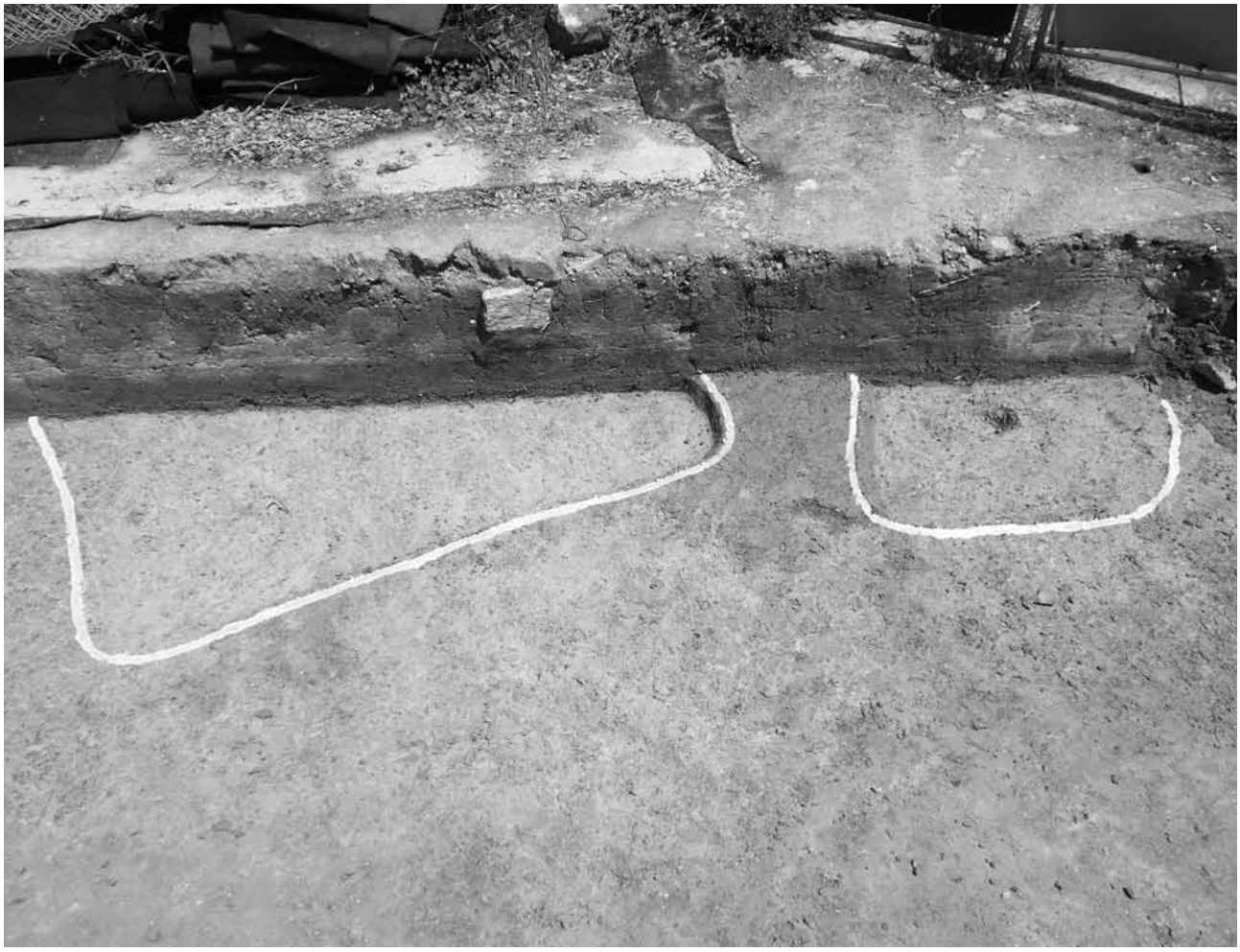
調査区東部（北から）



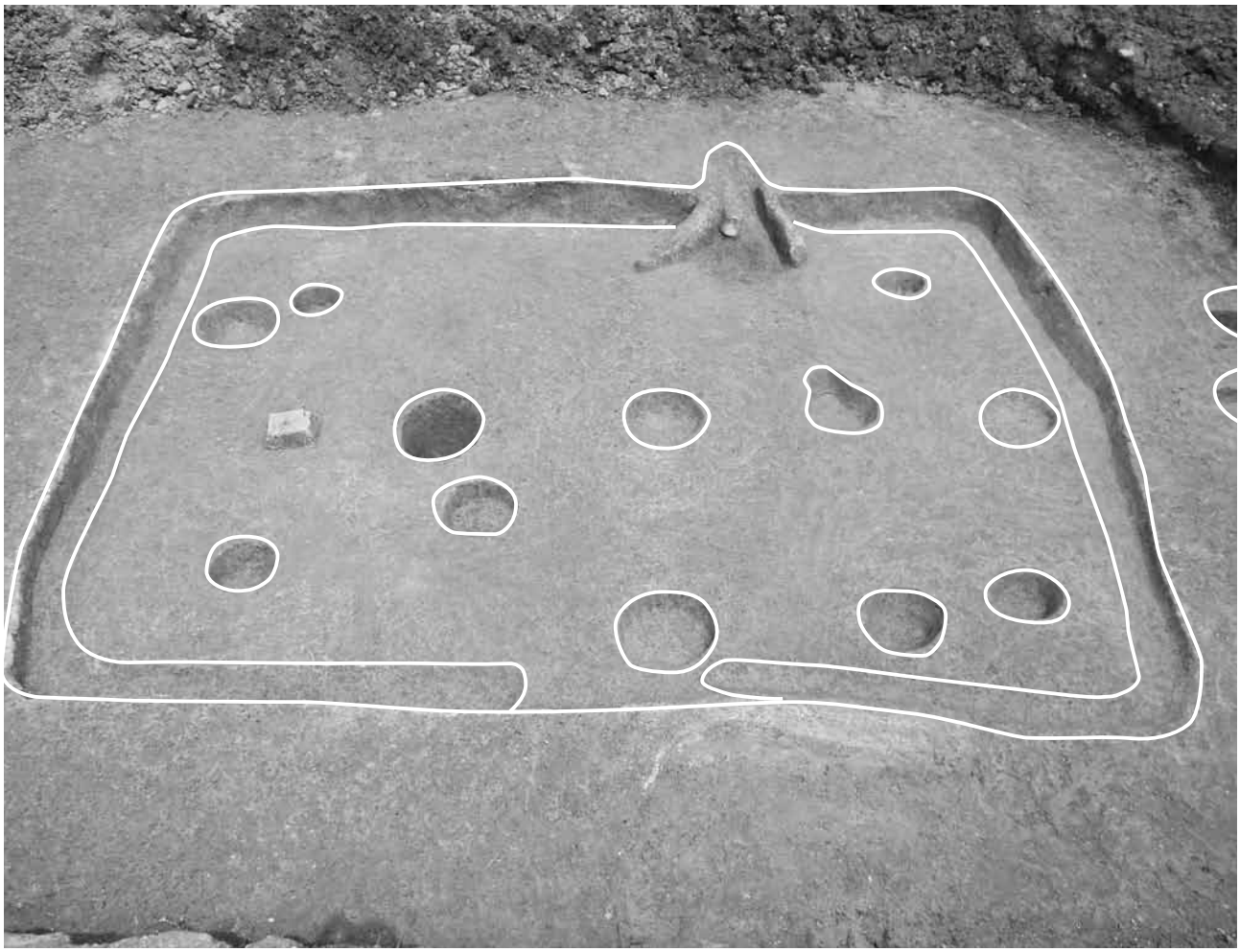
調査区西部（北から）

図版2　第2面（古墳時代）全景

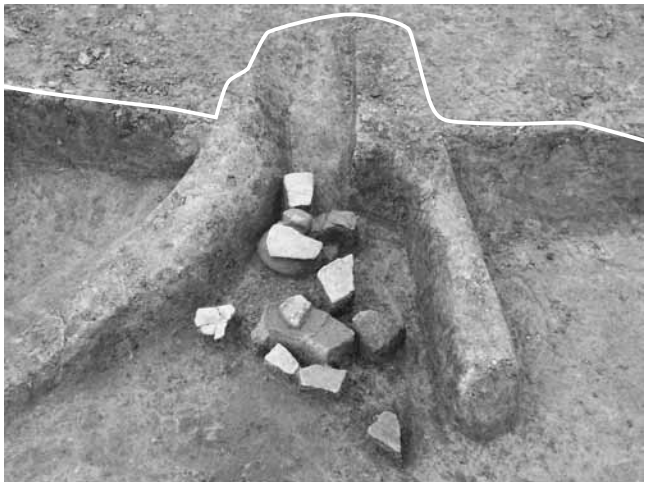
調査区西部（北から）



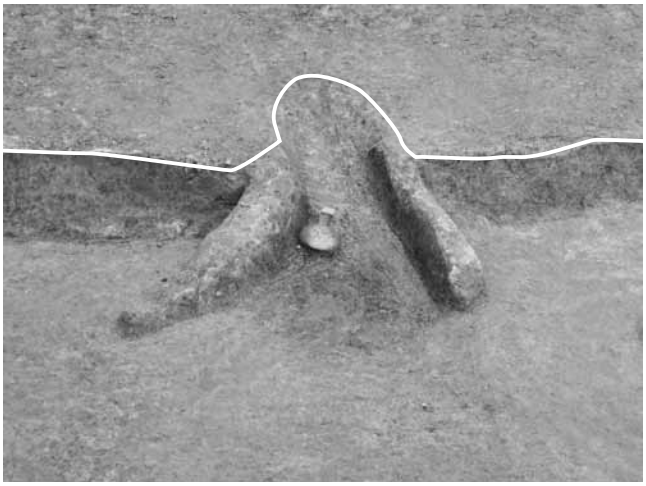
調査区東部の北端の遺構（南から）



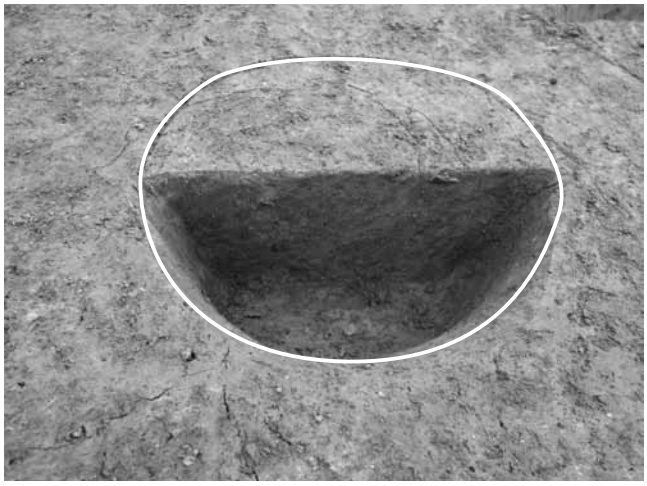
竪穴住居跡88全景（南から）



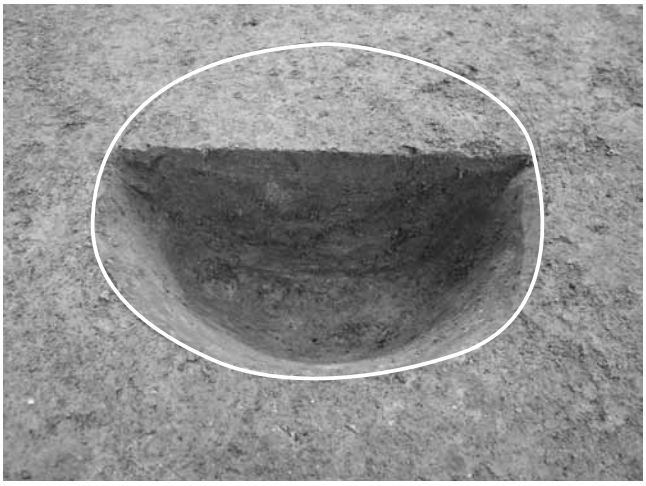
カマド内遺物出土状況（南から）



カマド完掘状況（南から）

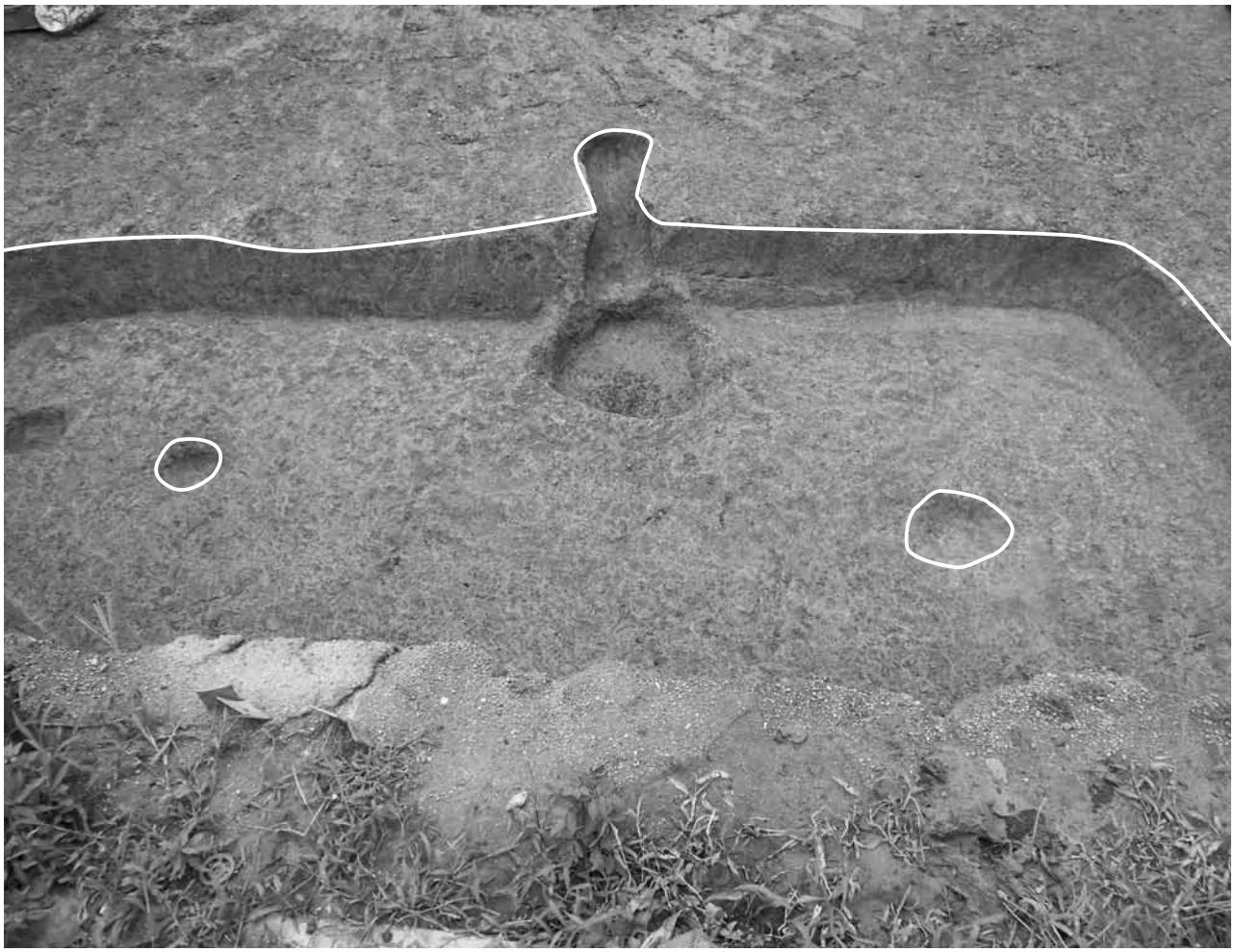


柱穴85（南から）

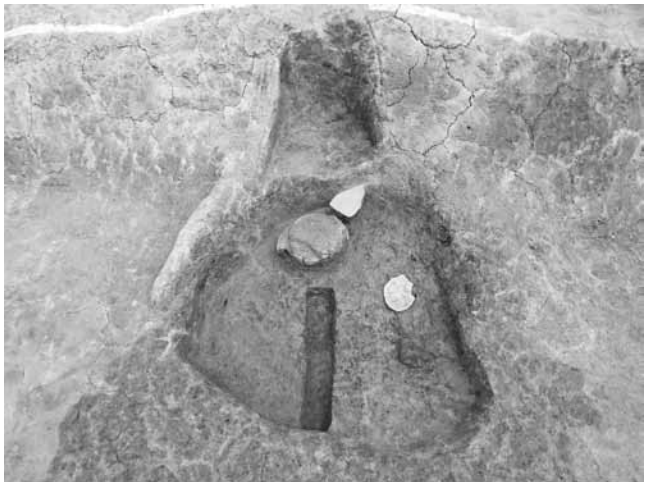


柱穴84（南から）

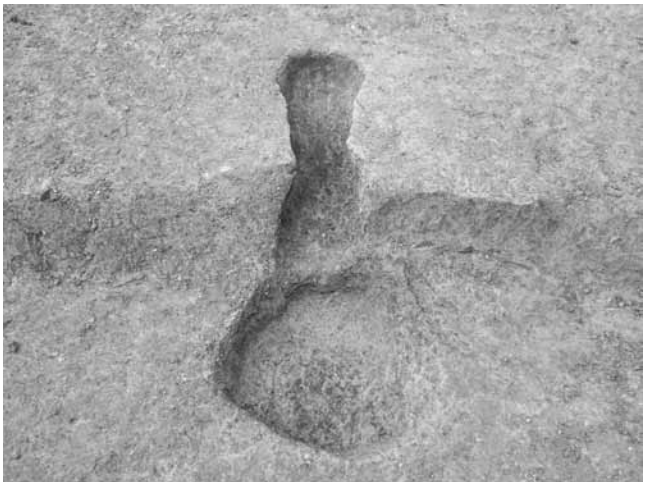
図版4　竪穴住居跡84



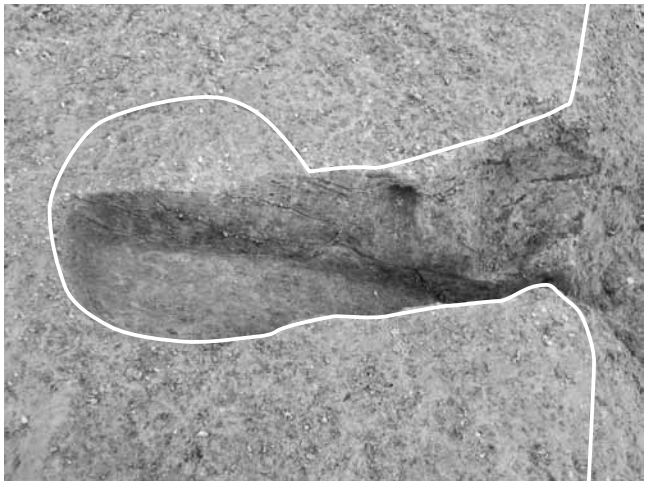
竪穴住居跡84全景（南から）



カマド内遺物出土状況（南から）

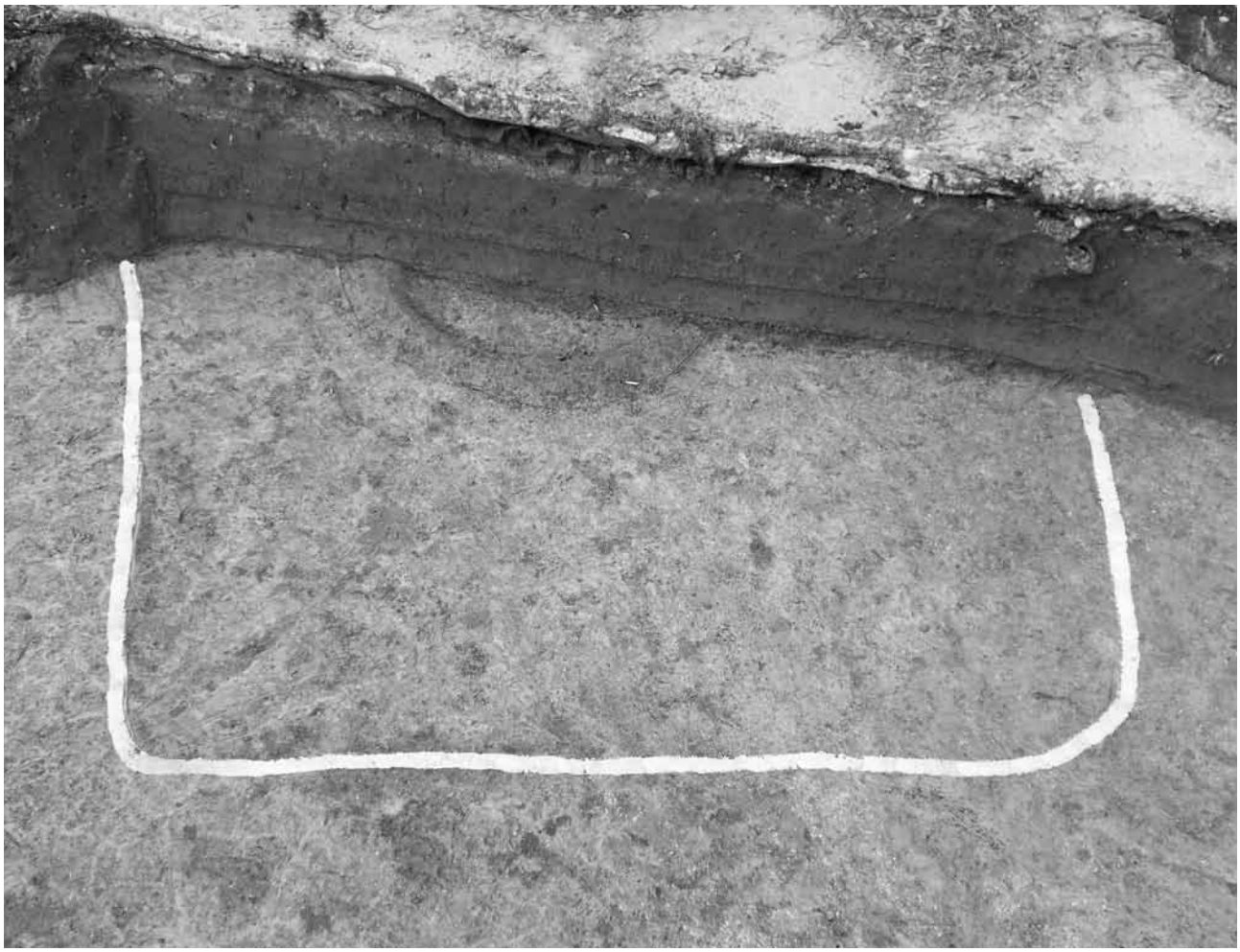


カマド完掘状況（南から）



カマド煙り出し断割り断面（西から）

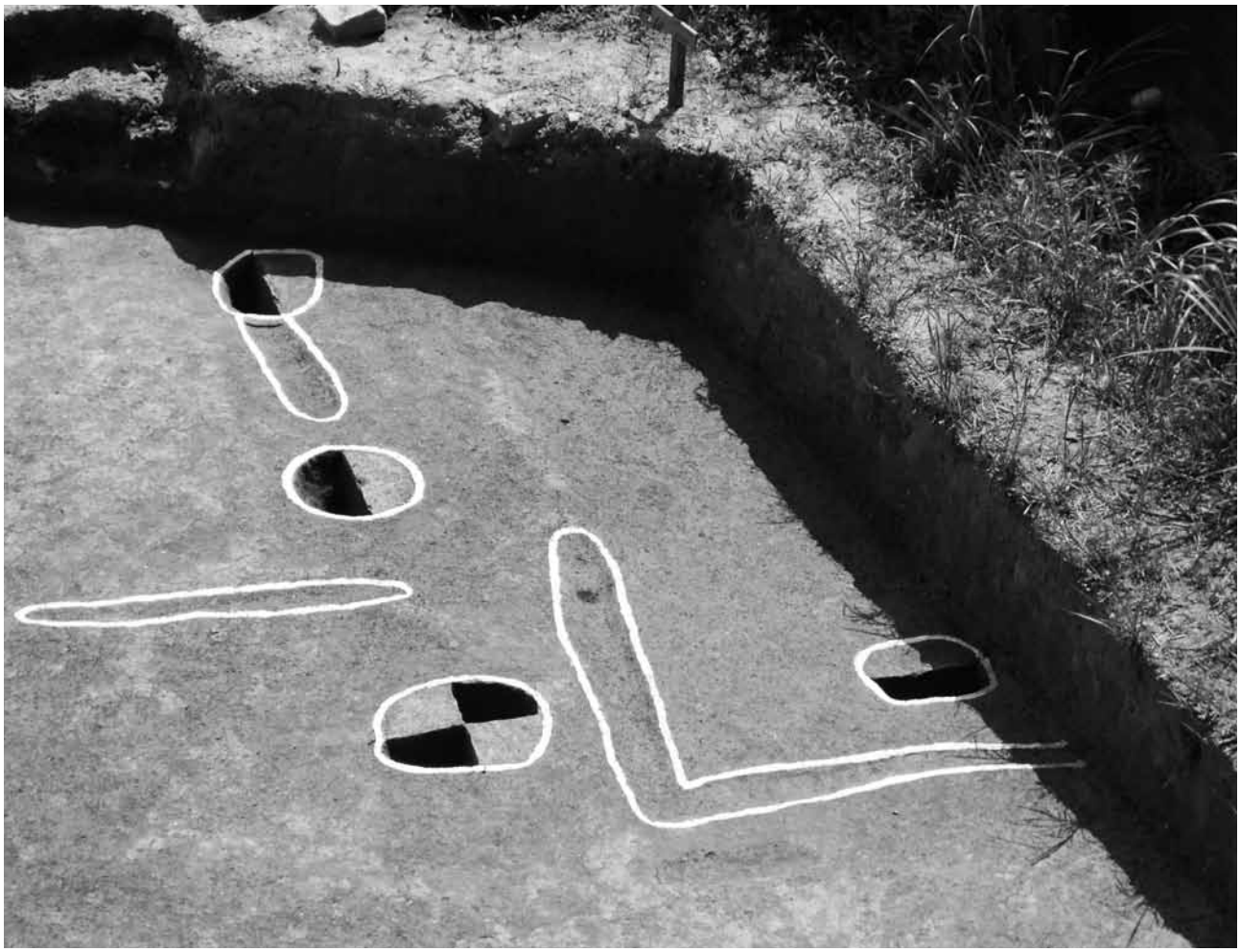
柱穴91（南から）



竪穴状遺構32全景（南から）

炉跡（南から）

図版6　掘立柱建物・確認調査第17トレンチ



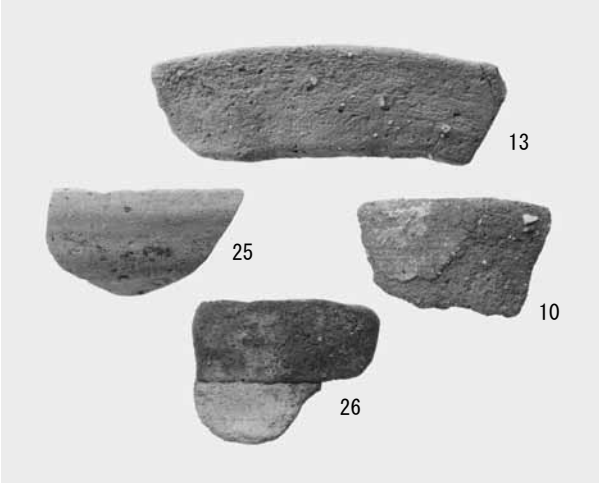
掘立柱建物（北から）

確認調査第17トレンチ断面と遺物の出土状況

図版7　出土遺物（1）

12

4



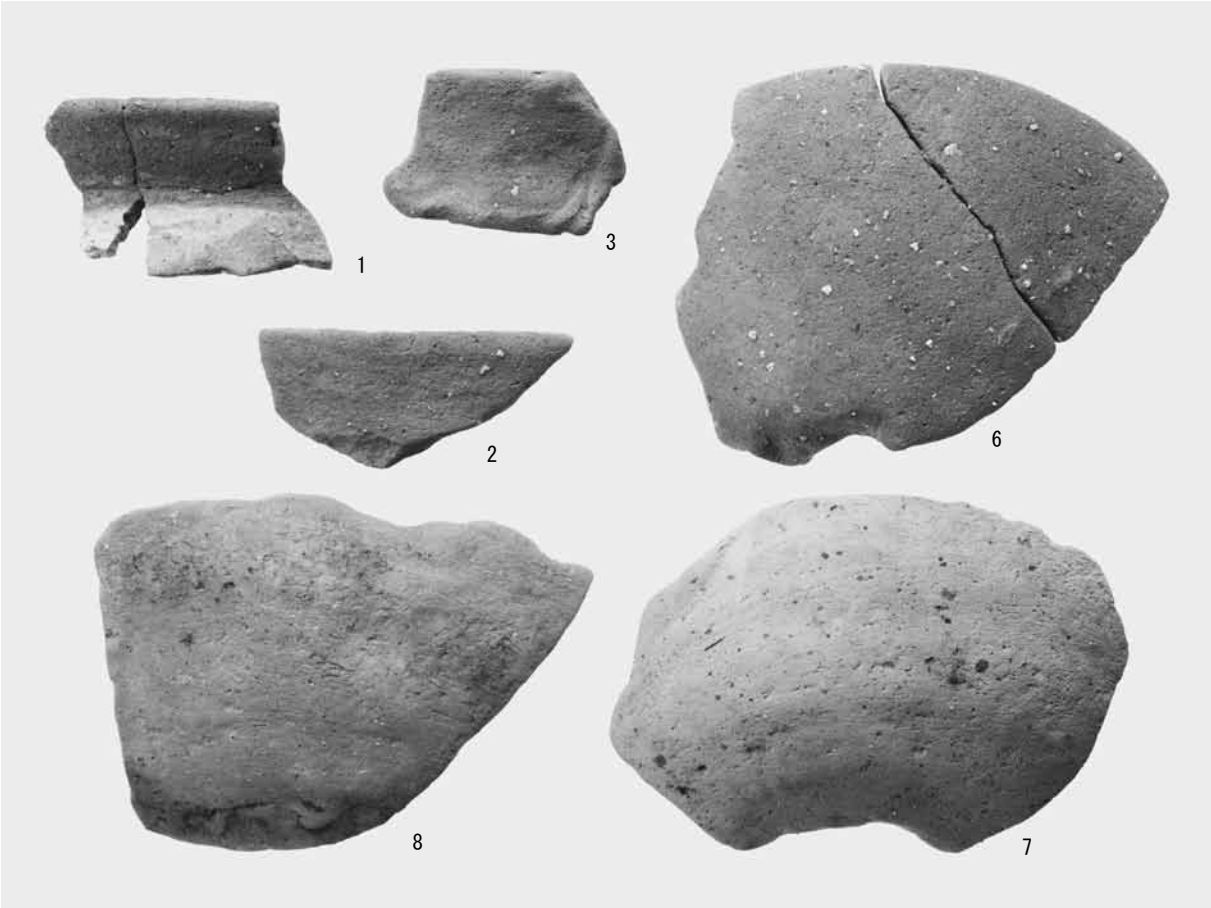
31

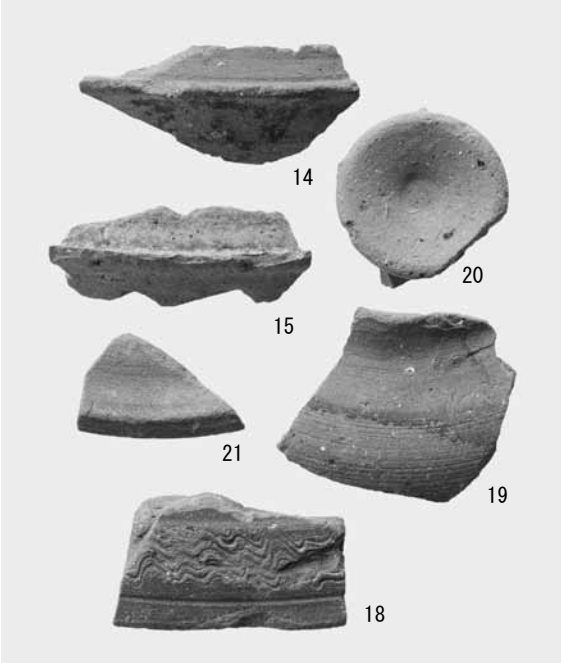
11

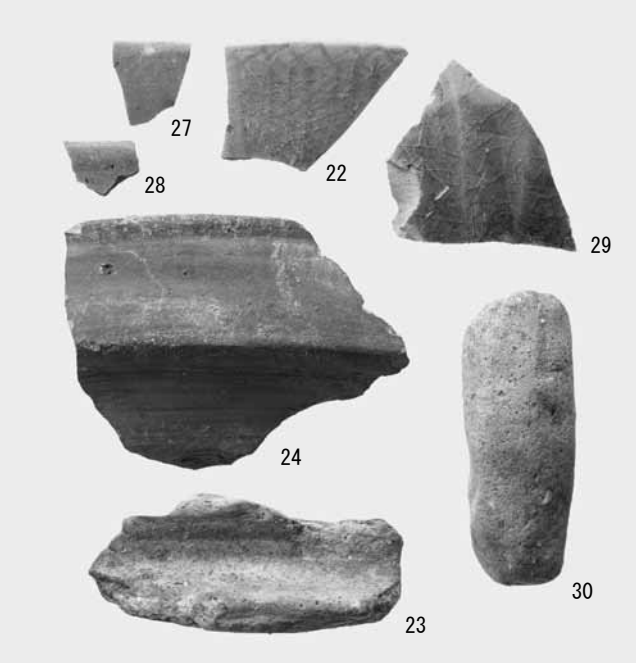
34

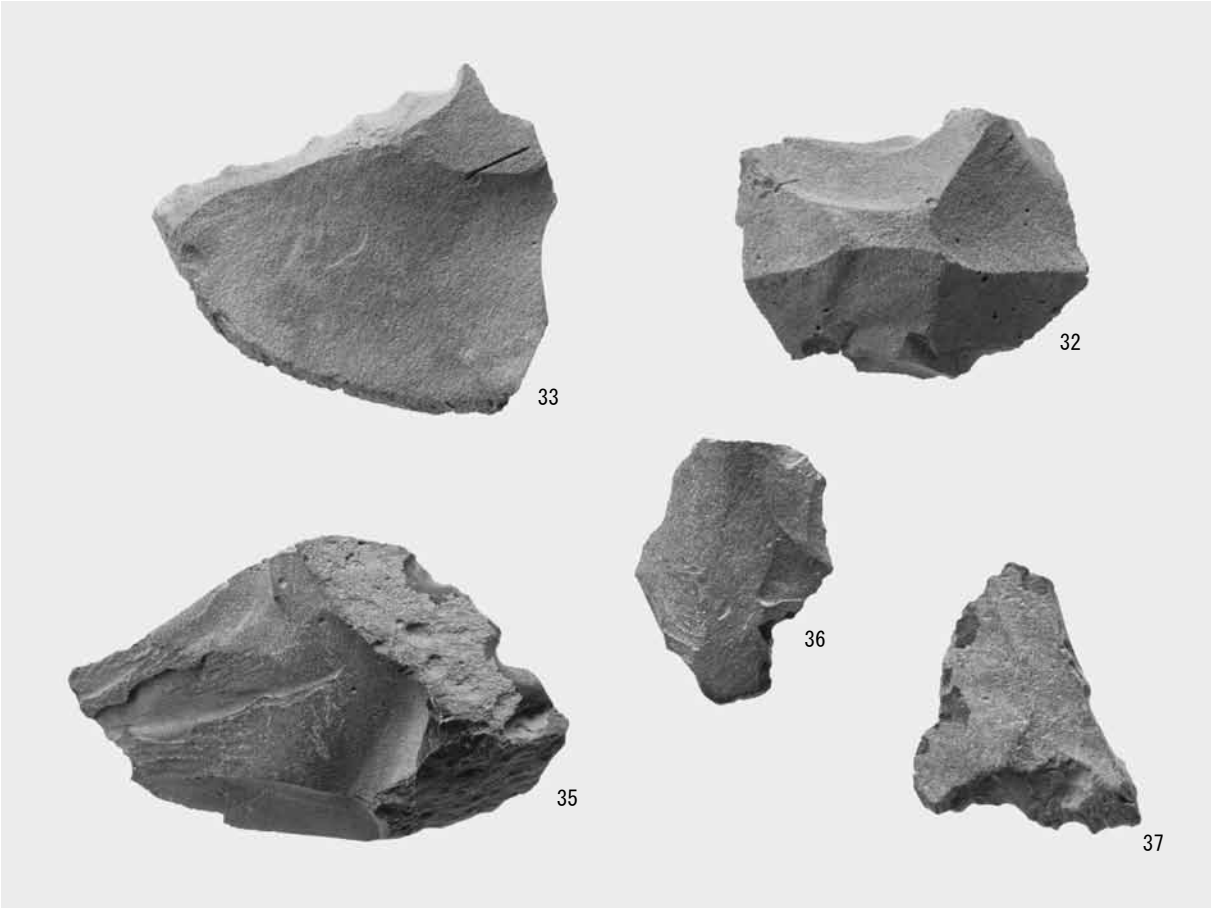
5

図版8　出土遺物（2）

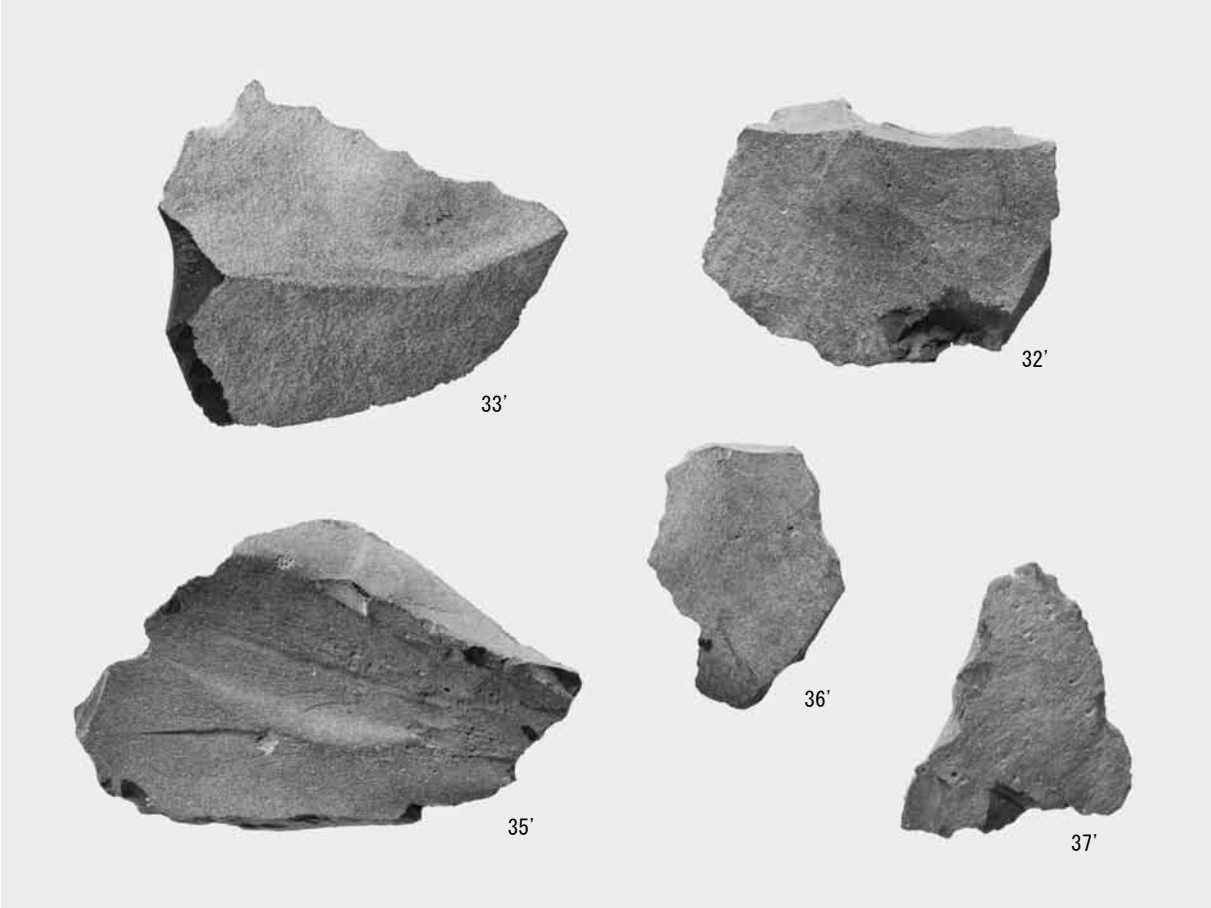








表面



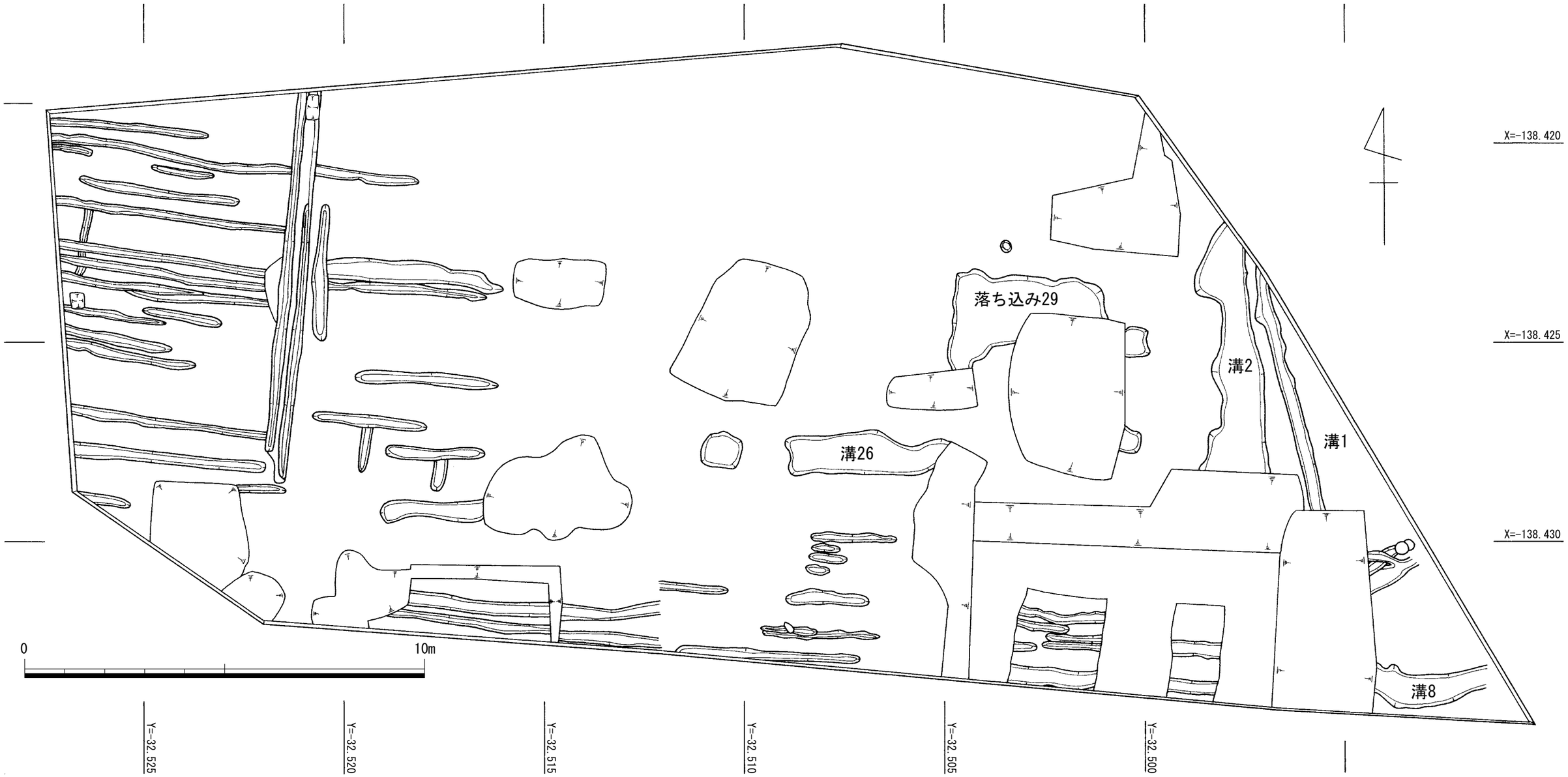
裏面

図版10　出土遺物（4）

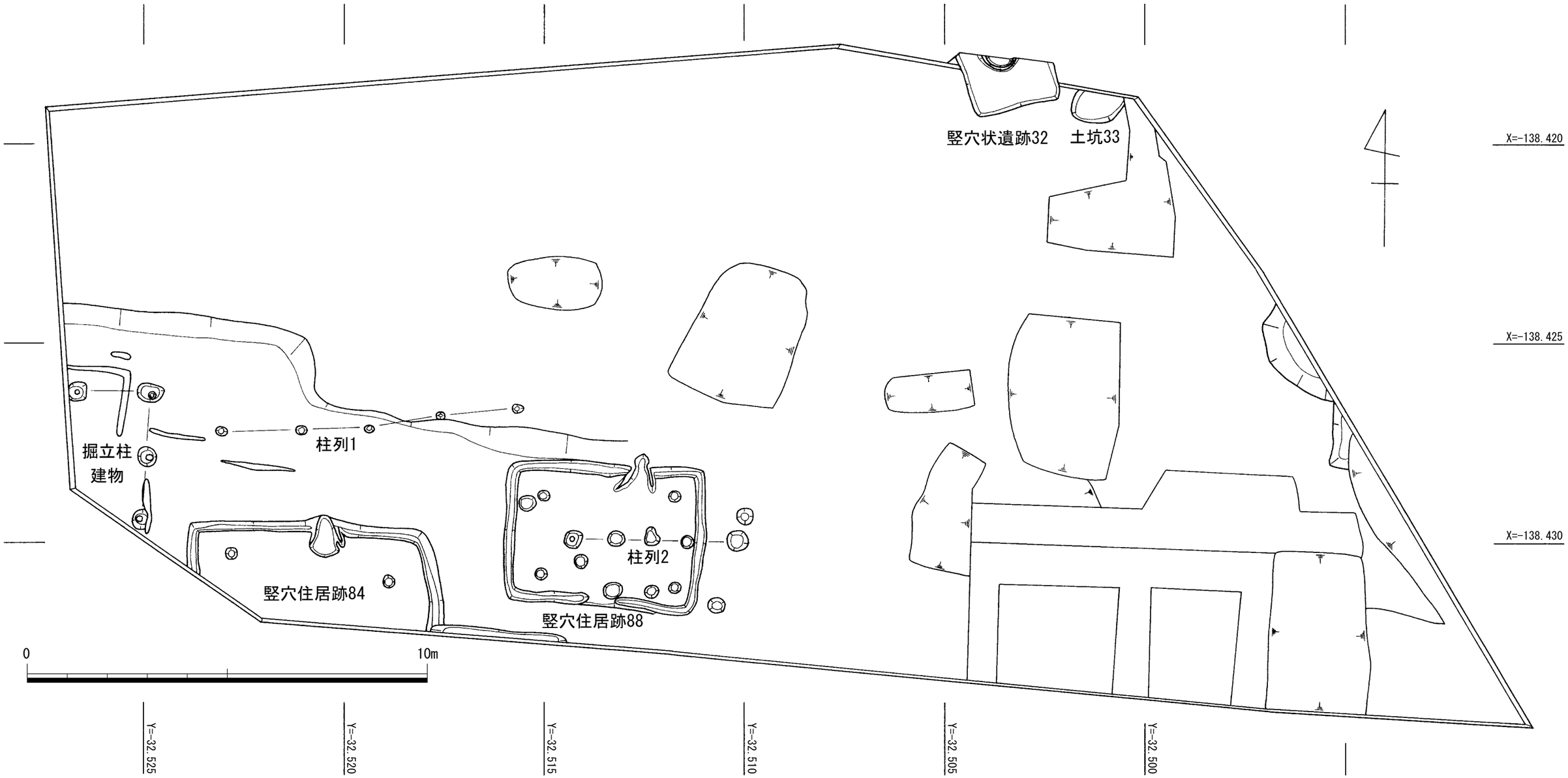
38

39

40



第４図　第１面（中世）平面図



第５図　第２面（古墳時代）平面図